



National Institutes for the Humanities (NIHU) Project  
“ Integrated Area Studies on South Asia (INDAS-South Asia) ”

# RINDAS

The Center for South Asian Studies, Ryukoku University

RINDAS Series of Working Papers 32

## ジャイナ教聖者伝の展開と ジャイナ教団



山畠倫志

龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター・南アジア研究センター  
The Center for South Asian Studies, Ryukoku University

研究テーマ：「南アジアの思想と価値の基層的変化」

Fundamental Changes in Thought and Values in South Asia

1990年代以降、インド社会が大きく変容していることは、多くの研究等により指摘のなされているところである。それは、政治的には民主主義の展開と深化で語られ、また経済的には、市場経済の発展と生活状況の向上、そして負の側面としての格差の拡大でもって捉えられる。社会的には、各種の社会運動の登場と興隆に依って立ち、文化宗教的には、多様なアイデンティティの主張が並列的になされうる状況をもって表される。こうした変容は、インド、ひいては南アジア社会の思想と価値が、その基層から胎動・変化しているがゆえと捉えられるだろう。

本プロジェクトでは、「南アジアの思想と価値の基層的変化」との統一テーマを設定し、ひとつに、龍谷大学が豊富な研究蓄積を有する、南アジア地域社会における思想の長大な時間軸における系譜的研究から、またひとつに、具体的な状況についての現地調査に基づく価値の基層的変化に関する分析から、研究テーマへの接近を試みる。これら両観点の統合的な考察を行い、現代インド・南アジア社会の基底部分における変容の起点と推進力の解明を目指す。なかでも、現代インド・南アジア社会の変容を代表的に表象する「下層民の台頭」の様相に着目し、思想史との連関から、その背景と論理を探究し、現地調査から、人びとの生活状況や意識、価値の変化についての研究・分析を行っていく。

本研究プロジェクトは、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」[第1期（2010～2014年度）、第2期（2015年度）]の活動と成果を発展的に継承し、「南アジア地域研究」（2016～21年度）として運営・実施されるものである。龍谷大学は国内6拠点のひとつとして、京都大学（中心拠点）、国立民族学博物館（副中心拠点）、東京大学、広島大学、東京外国语大学との連携・共同により、ネットワーク型地域研究として研究を展開・推進している。

拠点代表：嵩満也

RINDAS Series of Working Papers 32

## ジャイナ教聖者伝の展開とジャイナ教団

山畠倫志



# ジャイナ教聖者伝の展開とジャイナ教団

山畠倫志

## 1. ジャイナ教の聖者伝文学

ジャイナ教説話文学の伝統では、教義上重要とされる人物たちを 63 人の偉人 (*mahā / śalākāpuruṣa*) としてまとめ、伝記を作成することが頻繁に行われてきた。そうして作られた聖者伝は説話における枠構造の外枠としても機能し、そこに内外の説話が取り込まれ、特に北インドの西部地域においてジャイナ教聖者伝文学が発展していった。だが、それら聖者伝の展開過程をみていくと、12 - 13 世紀を境にそれまでの聖者伝文学の伝統には収まらない要素が多々確認される。そのような聖者伝文学の変化には様々な要因があると考えられる。本稿はまず聖者伝文学で聖者とされる 63 偉人について概観し、その形成と密接な関係があるラーマ物語とクリシュナ物語がジャイナ教文学でどのように表現されているかを示す。そして聖者伝文学に加わる形で現れる聖地称揚文学の登場とジャイナ教団の変化に触れた上で、聖者伝文学の展開とジャイナ教団の変化におおよそ同一の要因が想定できることを示す。

ジャイナ教の聖者伝説話は『カルパスートラ』 (*Kalpasūtra*) といった初期の祖師 (*tīrthaṅkara*) 伝から始まり、そこに他の祖師を加えた 24 祖師の伝記、さらに転輪聖王 (*cakravartin*) や他の偉人の伝記を含むようになり、63 偉人が形成されていく。[Cort, 1993; Jaini, 1993] プシュパダンタ (*Puspadanta*) の『マハープラーナ』 (*Mahāpurāṇa*) や ヘーマチャンドラ (*Hemacandra*) の『六十三偉人伝』 (*Triśaṣṭiśalākāpuruṣacarita*) などはそれらすべてを取り上げる典型的な聖者伝説話である。これらの説話はサンスクリット語やプレークリット諸語の一つであるマハーラーシュトラ語でも多く作成されたが、特に 9 世紀以降、アバランシャ語が頻繁に使用されるようになってから、聖者伝説話は形式的にも洗練され、サンディバンダ (*sandhibandha*) と呼ばれる形式を用いるようになる。これら様々な古典語で書かれた聖者伝文学を本稿では「チャリタ (*carita*) 文学」と呼ぶ。チャリタ文学は特にジャイナ教徒によるアバランシャ語文学の中心となる。12 世紀にヘーマチャンドラがまとめたアバランシャ語の文法や韻律も基本的にはこれらのチャリタ文学をもとに作成されている。

ジャイナ教聖者伝文学で重要な 63 偉人とは 24 人の祖師、12 人の転輪聖王、9 人のバラデーヴァ (*baladeva*)、9 人のヴァースデーヴァ (*vāsudeva*)、9 人のプラティヴィースデーヴァ (*prativāsudeva*) のことをいう。ほぼ伝説上の人物であるが、それぞれがジャイナ

教の歴史に基づく順序にのっとって並べられている。(図 1 を参照)

Tīrthaṅkara	Cakravartin	Baladeva	Vāsudeva	Prativāsudeva
1 R̄śabha	1 Bharata			
2 Ajīta	2 Sagara			
3 Saṁbhava				
4 Abhinandana				
5 Sumati				
6 Padmaprabha				
7 Supārśva				
8 Candraprabha				
9 Suvidhi				
10 Śītala		1 Vijaya	Tripr̄ṣṭha	Aśvagrīva
11 Śreyāṁsa		2 Acala	Dvipr̄ṣṭha	Tāraka
12 Vāsupūjya		3 Dharma	Svayambhū	Madhu
13 Vimala		4 Suprabha	Puruṣottama	Madhusūdana
14 Ananta	3 Maghavan	5 Sudarśana	Puruṣasimha	Madhukrīda
15 Dharma	4 Sanatkumāra			
16 Śānti	5 Śānti			
17 Kunthu	6 Kunthu			
18 Ara	7 Ara			
		6 Nandiṣeṇa	Puṇḍarīka	Niśumbha
	8 Subhauma			
		7 Nandimitra	Datta	Bali
19 Malli				
		8 Rāma	Lakṣmaṇa	Rāvaṇa
20 Munisuvrata	9 Padma			
21 Nami	10 Hariṣeṇa			
	11 Jayasena			
22 Nemi		9 Balabhadra	Kṛṣṇa	Jarāsandha
	12 Brahmadatta			
23 Pārśva				
24 Mahāvīra				

図 1. 六十三偉人一覧 Hemacandra の *Triśaṣṭiśalākāpuruṣacarita* に基づく [Cort, 1993: 206]

それぞれのカテゴリーについて簡単に説明すると、まず祖師は 24 人とされる。祖師の伝記はほぼ型が決まっており、どれも前世、親族、身体的特徴、弟子、涅槃について記述してある。だが、この 24 人のうち、第 1 祖師のリシャバ、第 22 祖師のネーミ、第 23 祖師のパールシュヴァ、そして最後のマハーヴィーラは他の祖師に比べてより詳細な伝記が述べられることが多い。リシャバは自身に加えて、息子のバラタとバーフバリンの説話がよく扱われる。ネーミはクリシュナの従兄弟とされ、クリシュナ説話との融合が図られる。マハーヴィーラの直前の祖師であるパールシュヴァはその作品の数が多く、内容も詳細である。

次に転輪聖王であるが、これはバラタクシェートラ全土の統治者を指す。その伝記は祖師と同様に一定の型で示される。その型とは「前世の行いの結果、転輪聖王として生まれ、敵を打ち破り、バラタクシェートラ全土を制圧する。そして、長期間の統治の後、苦行者となり、解脱に至る」というものである。転輪聖王の特徴として、14 の宝物 (ratna) と 9 つの財宝 (nidhi) を持つことが挙げられる。12 人が数えられるが、そのうち第 5、第 6、第 7 の三人は後に祖師となるため、転輪聖王としてのみ偉人に含まれるのは 9 人である。

最後にバラデーヴァ、ヴァースデーヴァ、プラティヴァースデーヴァであるが、それぞれ 9 人ずつおり、それぞれのカテゴリーから 1 人ずつ選ばれた 3 人で一組となっている。例えば、第 8 のバラデーヴァのラーマは同じく第 8 のヴァースデーヴァであるラクシュマナ、プラティヴァースデーヴァのラーヴァナと同時代に生まれたとされ、1 つの組をなししている。バラデーヴァの特徴は肌の色が白く、青い衣服を纏っていること、その旗印が椰子の木であること、そして 4 つの武具 (āyudha) を持っていることである。バラデーヴァはヴァースデーヴァと共にプラティヴァースデーヴァと戦い、それを打倒する。その後、ヴァースデーヴァが死ぬと、出家者となり、涅槃に達するというのがその説話の型である。

ヴァースデーヴァはナーラーヤナ (Nārāyaṇa) やヴィシヌ (Viṣṇu) とも呼ばれる。バラデーヴァ、ヴァースデーヴァ、プラティヴァースデーヴァを扱った説話の中において最も英雄的な行動をとるのがヴァースデーヴァである。対立するプラティヴァースデーヴァを殺害するのもヴァースデーヴァである。特徴としては肌の色が黒く、黄色の衣服を纏っており、胸に巻き毛を持つ。そして、鷹を旗印とし、七つの武具を持っている。ヴァースデーヴァはプラティヴァースデーヴァを殺した後、半転輪聖王 (ardhacakrin) となり、長い間、王国を治める。だが、その死後、戦争における殺生の罪によって地獄に転生する、という型で語られる。

プラティヴァースデーヴァは英雄ではあるが暴君として描かれる。バラタクシェートラの半分を統治する半転輪聖王であるが、バラデーヴァ、ヴァースデーヴァと敵対し、最終

的には殺害される。

これら 63 偉人はその名前からもわかるように、おそらくジャイナ教以外の伝統から様々な人物をとりこみながら形成されていったものである。

世紀	ラーマ物語中心	クリシュナ物語中心	63偉人伝
1			
2			
3	<i>Paumacariya</i>		
4			
5			
6			
7	<i>Padmacarita</i>		
8		<i>Harivamśapurāṇa</i>	<i>Ādipurāṇa</i>
9	<i>Pumacariu</i>	<i>Riṭṭhanemicariu</i>	
10			<i>Mahāpurāṇa</i>
11			
12			<i>Trīṣaṣṭiśalākāpuruṣacarita</i>
13			

図 2. 北インドの主なチャリタ文学作品 (Cort, 1993: 205) をもとに作成

図 2 にあるように偉人伝が形成された当初はラーマ物語が主であった。全ての偉人の伝記が含まれることを示す『マハープラーナ』は 9 世紀以降から増えていく。これは実際に聖者伝説話の主役となる対象が広がっていくことを示しており、さらには 12 世紀にソーマプラバ (Somaprabha) が著した『クマーラパーラ王の回心』 (*Kumārapālapratibodha*) のように実在の人物を基にした聖者伝も作成されていく。

それらの古典的な聖者伝に対して、12 世紀後半頃から 63 偉人の関係者を個々に取り上げた聖者伝が多く作成されていく。主題となる人物としては第 1 祖師リシャバの息子のバラタ (Bharata) とバーフバリン (Bāhubalin)、第 22 祖師ネーミとその妻ラージマティー (Rājimati) などが代表的である。また各地にある聖地との結びつきが強く示されるのも、この時期以降の聖者伝文学の特徴である。現グジャラート州にあるギルナル山はネーミと、シャトルンジャヤ山はリシャバとの関係が強調され、現ラージャスタン州に位置するアーブー山は聖地自体が作品の主題となる。使用言語もラークリット諸語やアパブラ

ンシャ語のような古典語ではなく、古グジャラート語を中心とした地域性の強い言語である。形式としてはアパブランシャ語によるチャリタ文学のサンディバンダのように一つの形式にまとまっていくのではなく、ラーソー (rāso, rāsa, rāsu)、チャルチャリー (carcarī)、バーラマーサー (bārahmāsā)、パーグ (phāgu) といった様々な形式が用いられるようになる。さらに時代が下るとこれらの諸形式は非ジャイナ教徒にも用いられるようになり、多様な文学作品へと展開していく。12世紀頃までプラークリット諸語やアパブランシャ語のチャリタ文学が担ってきた諸機能は様々な文学ジャンルの集合体として再形成される。

## 2. ジャイナ教聖者伝の中のラーマ物語の特異性

ジャイナ教説話においてラーマ物語はヴィマラスーリ (Vimalasūri, 1~5世紀) の『パウマチャリヤ』 (*Paumacariya*) 以来、マハーラーシュトラ語、サンスクリット語、アパブランシャ語など複数の言語でラーマを主人公として多くの作品が作られてきた。一方後で述べるクリシュナ物語は、言及自体は聖典の時代にまで遡ることができるものの、原則として第 22 代祖師のネーミナータ物語のなかの登場人物という形で扱われ続ける。ジャイナ教聖者伝は 63 偉人を枠とすると前節で述べたが、その枠の中に入る主要な物語はラーマ物語とクリシュナ物語である。そのため 63 偉人はその二つの物語をジャイナ教説話内に組み込む際に、既存の重要人物たちとの関係を整理していく過程で形成されてきたとも考えられる。

ここでは既に [山畠 2018b] で発表した内容について、資料を付加して再掲する。

ジャイナ教文献のなかで最初期に確認できるクリシュナへの言及は『アンタガダダサーオー』 (*Antagadadasāo*) となるが<sup>1</sup>、ラーマ物語は 5 世紀頃の『ナンディースッタ』 (*Nandīsutta*)<sup>2</sup> や『アヌヨーガッダーラー』 (*Anuyogaddārā*)<sup>3</sup> では聖典などの「正しい教え」と対比される「誤った教え」として「(マハー) バーラタ、ラーマーヤナ」と挙げられているのが最初期のものと考えられている。これにより、5 世紀当時にはすでに非ジャイナ教のラーマ物語やクリシュナ物語が広く認識されていたことが確認できる。

---

<sup>1</sup> *Antagadadasāo* 5.1 等

<sup>2</sup> micchasutam jam imam aṇṇāiehiṁ micchaddhitthihim sacchamda**buddhi**-mativiyappiyam, tam **jahā bhārahaṁ rāmāyaṇam** haṁbhīmāsurakkhaṁ koḍallayam sagabhaddiyāo khoḍamuham kappāsiyam nāmasuham kanagasattarī vaisesiyam buddhavayanam vesitam kavilam logāyatam saṭṭhitamtam mādharam purāṇam vāgaraṇam ṣāḍagādī, ahavā bāvattarikalāo cattāri ya vedā samgovamgā / *Nandīsutta* 70. 1

<sup>3</sup> loiyam bhāvasuyam jam imam aṇṇāiehiṁ micchadiṭṭhīhim sacchamda**buddhi** maivigappiyam / tam **jahā bhārahaṁ rāmāyaṇam** haṁbhīmāsurukkam koḍillayam ghoḍamuhaṁ sagabhaddiāo ... / *Anuyogaddārā* 49.

## 2.1. ラーマ物語の系譜

ジャイナ教におけるラーマ物語の系譜は主に3つに分かれる。前述の『パウマチャリヤ』の系列に加え、サンガダーサ (Saṅghadāsa) の『ヴァスデーヴアヒンディー』(Vasudevahinḍī)、およびグナバドラの『ウッタラプラーナ』(Uttarapurāṇa) の系統があるとされている。以下では上記3作品に加えて『パウマチャリヤ』の系列とされるシーラーンカ (Śīlāṅka) の『五十四偉人伝』(Cauppanṇamahāpurisacariya) と『ウッタラプラーナ』の系列とされるプシュパダンタの『マハープラーナ』を取りあげる。

## 2.2. ヴィマラスーリ『パウマチャリヤ』 1-5世紀

遅くとも5世紀までにはヴィマラスーリによってラーマを主人公とする『パウマチャリヤ』が著されている。既存のラーマーヤナについて具体的に難点を指摘し、ジャイナ教徒による「正しい」ラーマ物語に誘導する意図が明白である。『ナンディースッタ』等にみられる「誤った教え」としてのラーマ物語の認識とも符合する。

*Paumacariya* 2.105

*paumacariyammi etto, maṇo mahām kuṇai paramasamdeham /  
kaha vāṇarehi nihayā, rakkhasavasahā aibalā vi //*

パドマ (=ラーマ) の物語について私は大きな疑いを持っています。大変強力なラークシャサたちがなぜ猿たちに破れたのでしょうか。

*Paumacariya* 2.116

*sīho maṇea nihaō saṇeṇa ya kuñjaro jahā bhaggo /  
taha vivarīyapayatthaṁ, kaṭhi rāmāyanāṁ raiyām //*

獅子が鹿に打ち倒されたり、犬のせいで象が逃げ出したりといったようなありえない出来事が詩人たちによって『ラーマーヤナ』に書かれています。

*Paumacariya* 3.8-16

*paumacariyam mahāyāsa, ahayaṁ icchāmi pariphuḍam souṁ /  
uppāiyā pasiddhī, kusatthavādīhi vivarīyā //8  
jai rāvaṇo mahāyasa, nisāyaro suravaro vva aivirio /  
kaha so pariḥūo cciya, vāṇaratiriehi raṇamajjhē //9  
rāmeṇa kaṇayadeho, sareṇa bhinno mao araṇṇammi /  
suggīvasutāratthaṁ, chiddeṇa vivāio vālī //10  
gantūṇa devanilayam, surawai jiṇiū ṇa samaramajjhāmmi /  
daḍhakaḍhiṇaniyalabaddho, pavesio cārāgehammi //11*

*savvatthasatthakusalo, chammāsam̄ suyai kumbhakaṇṇo vi /  
kaha vāṇarehi baddho, seu cciya sāyarajalammi //12*

(中略)

*na ya rakkhaso tti bhaṇṇai, dasāṇaṇo neya āmisāhāro /  
aliyam ti savvameyam, bhananti jam kukaiṇo mūḍhā //15  
na ya pīḍhabandharahiyam, kahijjamāṇam pi dei bhāvattham //  
patthiva hīṇam ca puṇo, vayaṇam iṇaṇam chinnamūlam va /16*

皆様、私は明快なパドマの物語を聞きたいのです。誤った教えを説く者たちによつて事実とは異なったものができてしまっているのです。皆様、もしラーヴァナがインドラと同等の強力な力を持つならば、なぜ猿や獣たちに打ち負かされてしまったのでしょうか。なぜラーマが森で黄金の鹿を殺したのでしょうか。スグリーヴァとスターーるためにラーマはヴァーリンを欺いて殺したのでしょうか。天界に赴き、戦いのなかでインドラに打ち勝ち、頑丈な鎖で縛り付け、監獄に押し込んだこと、あらゆる武器や智慧をもってしてもクンバカルナは6ヶ月も眠っていた(のはなぜでしょうか)。またどうして猿たちが海中に橋を建てられたのでしょうか。(中略) ラーヴァナはラークシャサではなく、非菜食者でもありません。愚かな詩人たちが語ったことは全て誤りです。事前の説明なく語られても、その意味する所は明らかとはなりません。

『パウマチャリヤ』とヴァールミーキの『ラーマーヤナ』の相違点は多いが、ジャイナ教に基づく重要な相違点は、ラーマに殺生の罪を犯させないことである。特にラーヴァナ殺害の役割をラクシュマナに割り当てているのが代表的である。ラーマをヴァースデーヴアではなくバラデーヴアにあて、殺生の罪から逃れさせ、すみやかに悟りが得られるようしている。この背景としてはラーマをジャイナ教内の信仰対象の一人とする意図が推測される。ヴァースデーヴアを割り当てられたラクシュマナは地獄に転生することになる。ジャイナ教徒によるラーマ物語についてまとめた [Kulkarni, 1990] に基づいて、該当箇所を挙げる。

### *Paumacariya 73.1-28*

*uppannacakkarayaṇam, daṭṭhūṇam lakkhaṇam pavayajohā /  
ahiṇṇadiyā samatthā, bhananti ekkekkamekkeṇam //1  
eyaṇam tam phudaviyaḍam, aṇantavirieṇa jam purā bhaṇiyam /  
jāyam saṇpai savvam, kajjaṇam bala-kesavāṇam tu //2  
jo esa cakkapāṇī, so vi ya nārāyaṇo samuppanno /  
sīharahammi vilaggo eso puṇa hoi baladevo //3  
ee mahāṇubhāvā, bhārahavāsammi rāma-somittī /  
baladeva-vāsudevā, uppannā aṭṭhamā niyamā //4*

*daṭṭhūṇa cakkapāṇīm, somittī rāmaṇo vicintei /  
taṁ sampai sampannam, aṇantavirieṇa jaṁ bhaṇiyam //5*

(中略)

*daṭṭhūṇa cakkahatthaṁ, somittiṁ rāvaṇo savaḍahuttam /  
mahuravayanehi etto, bihīsaṇo bhaṇai dahavayaṇam //13  
ajja vi ya majjha vayaṇam, kuṇasu pahū jāṇiūṇa appahiyyam /  
tuhu paumapasāṇeṇam, jīvasu sīyam samappento //14*

(中略)

*so evabhaṇiyam etto, cakkam nārāyaṇo bhamādeum /  
pesei paḍivahaṇeṇam, laṅkāhivaissa āruṭṭho //24  
āloīūṇa entam, cakkam ghaṇagosabhīsaṇam dittam /  
sara-jhasara-moggarehim, ujjutto taṁ nivāreum //25  
rubbhantaṁ pi ahimuhāṇam, taha vi samalliyai cakkarayaṇam taṁ /  
puṇṇāvatasāṇasamae, seṇiya maraṇe uvagayammi //26  
aimāṇiṇassa etto, laṅkāhivaissa ahimuhassa raṇe /  
cakkeṇa teṇa siggham, chinnam vacchatthalam viulam //27  
candāṇileṇa bhaggo, tamālaghaṇakasiṇaaliulāvayavo /  
ajjaṇagiri vva padio, dahavayaṇo raṇamahīvaṭṭhe //28*

ラクシュマナのもとにチャクラが出てきたのを見て、全（軍勢）は喜んで互いに語り合った。アナンタヴィールヤが以前に明瞭に述べていたように、この全ての出来事がバラデーヴァにしてケーシャヴァ（であるラクシュマナ）へと至っているのだ。チャクラを持った彼は、ナーラーヤナとともにあり、バラデーヴァとして獅子の戦車に座している。この強力なるラーマとラクシュマナがバラタ地域における第8のバラデーヴァとヴァースデーヴァである。チャクラを手に持っているのを見て、ラーヴィナはラクシュマナについて考えた。「今、あの者はまさに限りない力を備えている」（中略）ラーヴィナに相対した手にチャクラを持つラクシュマナを見て、ヴィビーシャナは優しい言葉でラーヴィナに語りかけた。「王よ、ご自身のためというのをご理解いただき、私の申し上げることをお聞きください。シーター様をさらってしまわれたあなた様はラーマ様のご恩寵によって生かされているにすぎません」（中略）こうして怒ったナーラーヤナ（=ラクシュマナ）は回転しているチャクラをランカーの王を殺すために投げつけた。轟音をとどろかせ、恐ろしく光り輝くチャクラを見て、矢やジャサラや棍棒で必死に妨害した。「シェレーニカ王よ（=物語の聞き手）、福徳が無くなる時、死が近づく時には止めても向かってくるそのチャクラがやってきます」戦場で前面に立っていた傲慢なランカーの王の巨大な胸部はそのチャクラによって即座に切り落とされた。頑丈なタマーラ樹がクリシュナの蜂の群れで四肢を覆われたようになったランカーの王は、まるで強風でアンジャナ山が倒れたように戦場に倒れこんだ。

*Paumacariya* 118.1

*aha so sīyāindo narayattam lakkhanam sumariūna  
avainno maṇavego padibohāṇakāraṇujutto //*

かつてシーターであったインドラは地獄にいるラクシュマナのことを思い出し、悟りを得させるためにすみやかに降下していった。

ただ、『ラーマーヤナ』のラーマはラーヴァナ殺害以外でも猿王スグリーヴァの兄ヴァーリンの殺害も実行している。それに対してヴィマラスー리는ヴァーリンが自発的にスグリーヴァに王位を譲ったことにして、ヴァーリン殺害のエピソードを大きく改変している。

*Paumacariya* 9.37-46

*soūṇa vālivayaṇam, sannaddho dahamuho saha baleṇam /  
aha niggao turanto, tassuvariṁ ambaratalenam //37  
rakkhasatūrassa ravaṁ vālī soūṇa abhimuho calio /  
kaisuhadasamāṇino, raṇarasataṇhāluo vīro //38  
kovaggisampalitto, vālī mantīhi uvasamaṇ nīo /  
bahubhaḍajīyatākaram, mā kuṇaha akāraṇe jujjham //39  
aha bhaṇai vāṇarindo, samgāme rāvaṇam balasamaggam /  
karayalaghāyābhīhayam, karemi sayalam kulam cuṇṇam //40  
kāūṇa pāvakammaṇ, erisayaṇ bhogakāraṇatāe /  
naraya-turiesu dukkham, bhottavvam dīhakālammi //41  
puvvam mae painnā, ārūdhā sāhusanniyāsammi /  
mottūṇa jiṇavarindaṇ, annassa thuī na kāyavvā //42  
na karemi samayabhaṇgam na ya jīvavirāhaṇam mahājujjham /  
giṇhāmi jiṇudditīṭham, pavajjam saṅgaparihīṇam //43  
varanārithaṇayaḍovari, je hatthāliṇgaṇujjayā majjham /  
te na ya karenti ettiya, annassa siraṇjalipāṇāmaṇ //44  
saddāveūṇa tao, suggīvam bhaṇai vaccha nisuṇehi /  
tassa karehi paṇāmaṇ, mā vā rajje mae ṭhavio //45  
ṭhaviūṇa kulādhāraṇ, suggīvam ujjhiūṇa gihavāsam /  
nikkhanto cciya vālī, pāse muṇigayaṇacandassa //46*

ヴァーリンの言葉を聞いて、ラーヴァナは軍勢を引き連れて準備し、彼に近づくために急ぎ空中から降りてきた。ヴァーリンはラークシャサの楽器の出す音を聞いて、戦いを楽しむ気持ちをかき立てられ、ヴァーナラの戦士たちとともに勇敢に（ラーヴァナの）面前に向かった。怒りに燃えるヴァーリンに大臣は近づき、「多くの戦士たちを死に至らしめる戦闘を理由もなく行ってはなりません」と言った。そこでヴァーナラの王はこう言った「戦場においては軍勢もろともラーヴァナも全てこの掌の一撃で

粉々にしてやる。だが、果報を得る目的からすると、そんな罪業を行えば、地獄や動物に生まれ変わる苦しみを長い間享受することになってしまう。以前、ある聖者のもとで誓いを立てた。ジナを捨てて、他のものを崇めることは決してしない、と。私は誓いを破ることはしない。人命を損なうような大戦もしない。ジナの言葉に従い、執着を捨てて出家する。素晴らしい女性の胸の上で抱きしめようとしていた最中の手は、今やそのようなことはせず、他の方の頭上で合唱することになるだろう」それから、スグリーヴァを呼んで、「弟よ、聞け。王国は（お前に）譲る。お前はあの者（＝ラーヴァナ）に敬礼せよ。スグリーヴァを一族の長と定めた後、財産を処分し、ヴァーリンは聖者ガガナチャンドラのもとへと出て行った。

### 2.3. サンガダーサ『ヴァスデーヴアヒンディー』 7世紀以前

ラーヴァナ殺害をラクシュマナの役割とする『パウマチャリヤ』の設定は他のラーマ物語にも共通する。しかし、他の人物の殺害の記述が作品によって異なる。

『パウマチャリヤ』とは別系統とされる『ヴァスデーヴアヒンディー』におけるラーマはラーヴァナ殺害は行わないが、ヴァーリンの殺害は実行する。また『パウマチャリヤ』では除かれている黄金の鹿のエピソード（鹿に化けているマーリーチャを殺害する）が含まれているが、『ヴァスデーヴアヒンディー』では鹿の殺害にまでは至らない。

*Vasudevahīṇḍī, Rāmāyana*

*haṇumayā bhaṇiyā amhe vijjāharā amahaṁ sāmī suggīvo so bhāūṇā balavayā vāliṇā pāraddho  
amhehim samāṇ jīṇāyatāṇasamsio acchatījogo mittayāe / tato rāmeṇa paḍivāṇṇam evaṁ hou  
tti kao ya ḡehim aggisakkhiko mittasaṁbamdhō / paricchiyabalo ya rāmo vālivāhe ḡiutto  
suggīvena / te ya bhāyaro sarisarūvā kamcaṇamālāsohiyaviggahā / tato visesam ajāṇayā  
rāmeṇa nisaṭṭho sāyako / parāio ya suggīvo ya vāliṇā / tao suggīvassa visesaṇam kayaṁ  
vaṇamālāe / ekkasāyakavivāḍie vālimmi rāmeṇa ṭhavio rāyā suggīvo /*

ハヌマーンは言った「我々はヴィドヤーダラであり、我々の王はスグリーヴァ様です。スグリーヴァ様は強力なヴァーリンを恐れだして、我々とともにジャイナ寺院へと避難したのです。友を見つけるにはちょうどよかった」それに対してラーマは「そのとおりです」と答え、火のもとで友人の関係を結んだ。その力を試されたラーマはスグリーヴァのためにヴァーリン殺害を命じた。その美しい兄弟は黄金の首飾りで身体が光り輝いていた。そこで相手を特定できないので、ラーマは矢を放てなかった。スグリーヴァはヴァーリンに打ち負かされ、スグリーヴァは自身の身体を花輪でかざった。そこで一本の矢がヴァーリンを貫き、ラーマはスグリーヴァを王座に据えた。

## 2.4. シーラーンカ『五十四偉人伝』 9世紀

本作は 54 人(*cauppanna*) の偉人の伝記とタイトルにあるが、プラティヴァースデーヴアの 9 人を偉人に含めていないため、実際には 63 偉人を扱っている。明確に 63 偉人という体系を打ち出したのは 9 世紀に著されたこの作品が最初期のものとなる。ただ、この作品も『ヴァスデーヴアヒンディー』と同様にラーマがヴァーリンを殺害しており、バラデーヴアとしての位置づけが徹底していない。ただ、ラーマ物語全体としては『パウマチャリヤ』の系統に属すると見なされている。[Bruhn, 1954] 参照。

*Cauppannamahāpurisacariya* 44-45

atthi iheva jaṁbuddhē dīve bhārahe vāse aujjhā nāma ḥayarī salaṇayaraguṇovoveyā / tīe ya  
dasaraho nāma mahārāyā privasai / tassa y tiṇṇi bhajjāo, tam jahā-kosalā kekaī sumittā ya /  
tattha kosalāe rāmabhaddo putto, kekaīe bharaho sattuggho ya, sumittāe lakkhaṇo ya kumāro /  
dasaraheṇa ya rāmassa rajjāhisee samappie kekaīe keñai vavaeseṇa rāmo salakkhaṇo vanam  
pesio, bharaho ya rajje ṭhāvio tti / rāmena ya vanagamaṇāeso rajjāhiseo vva papphulla-  
vayaṇakamaleṇam sammam paḍicchio, avi ya putta paḍicchasu lacchiṁ, gacchasu ya vanam  
ti dasarahāese / nisuyammi sarisao cciya muharāo sahai rāmassa //3  
piuṇo paḍicchiūṇam āesamaṇāulo pahaṭṭhamāṇo /  
saviṇayalakkhaṇasahio raṇṇammi gao sabhajjāo//4  
aha vasai tattha jaṇavajjiyammi raṇṇammi jāyaparioso /  
sīyā-lakkhaṇapariyaṇaparipālanam etta samtuṭṭho //5  
laṅkāe rāvaṇo bhuvaṇatavaṇo rakkhasīhiṁ vijjāhiṁ /  
balavamakajjāyaraṇeṇa dūsio kalusiyacaritto //6  
suppaṇahāe kayaṇiggahāe vayaṇeṇa rāmabhajjāe /  
pariṇaivaseṇa rāyaṇam kālakarāyadḍhio kuṇai //7  
māriyamaya kayārāvavaṇcaṇā vanciūṇa te do vi /  
niyabala-kittī-rakkhasakhayamkarī avahiyā sīyā //8  
rakkhasamāyam nāūṇa dukkhiyā rāma-lakkhaṇā dhaṇiyam /  
sīyāharanavisaṇṇā hāhārava miliya tavasiyaṇṇā //9  
nīhayakharadūsaṇabalā jaḍāuvuttamtapīdiyā nīyayam /  
kimkāyavvavimuhiyā miliyā suggīvaharivaiṇo //10  
haṇṭūṇa vāṇaravaiṇ vālim aṇāuhamamimeyabalakaliyam /  
sīyāvattāṇimittam rāmo pesei haṇuyantaṇ /11  
(中略)  
to lakkhaṇeṇa cakkeṇa teṇa khaladasasirassa kūrassa /  
chinṇam tālaphalam piva sīsaṇ dharanīe palhatthanam //24  
nīhayammi rakkhasīṇdammi laddhasīhiṁ pattavijaehiṁ /  
to rāma-lakkhaṇehiṁ rajjammi bihīsaṇo ṭhavio //25

ジャンブ州のバラタ地域にあらゆる美点を備えるアヨーディヤーという町があり、そこにダシャラタという王が居を構えていた。かれにはコーサラー、ケーカイー、スマトラーの三人の妻がいた。コーサラーにはラーマ、ケーカイーにはバラタとシャトルグナ、スマトラーにはラクシュマナという王子がいた。ダシャラタがラーマに戴冠

を行おうとしたとき、ケーカイーによるなんらかの企みでラーマはラクシュマナとともに森に送られることになり、バラタが王国を継承することになった。ラーマは森に行くようにとの命令に戴冠の場合と同様に、開花した蓮のような顔で快く承諾した。

「息子よ、おまえに幸運があるように。森へ行きなさい」とダシャラタは命じた。それを聞いてもラーマにはまるで鳥の声ほど軽いものだった。戒律をよく守るラクシュマナとシーターとを引き連れて森へと行った。そこで人里離れた荒野に赴くことを喜び、シーターとラクシュマナを供として引き連れることにも喜んだ。ランカーではラーヴァナがラークシャサの魔力で世間を苦しめており、強大な力をたのみとして悪行を行っていた。追放されたシュルーパナカの言葉によってラーマの妻へと心が向いた結果、時間の力にひきずられ、運命を定めた。マーリーチャが正体の（鹿）があげた声に兄弟は二人ともだまされた。ラークシャサから構成され、彼の誉れである自己の軍勢を破滅に導くことになるシーターがさらわれた。ラークシャサの幻術だったことを知り、ラーマとラクシュマナは大変悲しんだ。シーターの誘拐に心を痛め、嘆く声を苦行者に聞かれた。カラとドゥーシャナの軍勢を殺害し、ジャターユスから直接話を聞いて苦しんだ。何をすべきかということに向き合った彼らは猿王スグリーヴァと会見した。ラーマはヴァーナラ族の王である強力なヴァーリンを殺害し、シーター解放のためにハヌマーンを送り出す。（中略）ラクシュマナのチャクラによって恐るべき頑丈なラーヴァナの頭が切られ、ヤシの実のように大地に投げ出された。ラークシャサの王が死ぬと、奪われたシーターを奪還し、ラーマとラクシュマナはヴィビーシャナに王国を継がせた。

## 2.5. グナバドラ『ウッタラプラーナ』 9世紀

63 偉人全員の伝記を記すことを企図したジナセーナ (Jinasena, 8世紀) の『アーディップラーナ』 (*Ādipurāṇa*) の後を継いで製作された。ヴァーリンを殺害するのはラクシュマナである。黄金の鹿についても言及されているが、空中に逃亡したため殺害はされない。

*Uttarapurāṇa*. 68. 201

*hastagrāhyam ivātmānam kṛtvoddīyāt idrūagah /  
vrīhā karṣati mām māyāmrgo vaiśo 'tidurgrahah //*

もう少しで自分に手が届くように見せてから空高く飛び去っていった。あの幻の鹿は意味も無く私 (=ラーマ) を駆り立てたのだ。

*Uttarapurāṇa*. 68.464

ākarṇākṛṣṭanirumuktaniśātasitapatriṇā / lakṣmaṇena śiro 'grāhi tālaṇ vā bālinah phalam //  
最後にラクシュマナが耳まで引き裂く鋭い白矢で、ヴァーリンの首をターラ樹の果実のように切り落とした。

## 2.6. プシュパダンタ『マハープラーナ』 10世紀

この作品も 63 偉人全てを扱っており、基本的に『アーディプラーナ』と『ウッタラプラーナ』の記述を踏襲している。また、ヴィマラスーリと同様に『ラーマーヤナ』の疑問点を具体的に挙げている。

*Mahāpurāṇa* 69.3

jiṇacaraṇajuyalasaṁṇihiyamai / āuccchadda pahu magahāhivai //1  
ṇiru samsayasallium majjhū maṇu / gottamagaṇahara muṇīṇāha bhanu //2  
kiṁ dahamuḥu sahūm dahamuhahim huu / kira jammem garuyau tāsu suu //3  
jo summai bhīṣaṇu atulabalu / kiṁ rakkhasu kiṁ so maṇuya khalu //4  
kiṁ amciu teṇa sireṇa haru / kiṁ vīsaṇayanu kiṁ vīsakaru //5  
kiṁ tahu maraṇāvaha rāmasara / kiṁ dīhara thira siriramaṇakara //6  
suggīvapamuha ḥisīyāsidhara / kiṁ vāṇara kiṁ te ḥarapavara //7  
kiṁ aju vi deva vihīṣaṇahu / jīviu ḥa jāi jamasāṣaṇahu //8  
chammāsaim ḥidda ḥeya tuyai / kiṁ kumbhayaṇu ghorai suyai //9  
kiṁ mahisahāṣaṇim dhau lahai / lai lou asaccu savvu kahai //10  
vammīyavāṣavayaṇihiṁ ḥaṇiu / aṇṇāṇu kummaggakūvi paṇiu //11  
gottama pomacarittu bhuvāṇi pavittu payāṣahi / jiha siddhatthasueṇa diṭṭhaum tiha mahuṇ bhāṣahi //ghattā

ジナの美しいおみ足に心を向けながら、マガダ王は尋ねた。私の心は疑いの気持ちでつぶされそうです。ガナの長、牟尼の長ガウタマよ、教えてください。ラーヴァナは十の顔とともに生まれたのでしょうか。その息子は生まれた時から彼より大きかったのでしょうか。ラーヴァナは比類無い力を持つと聞いていますが、彼は一体ラクシャサなのでしょうか、人間なのでしょうか。ラーヴァナはその頭でシヴァを崇めたのですか。彼には 20 個の目と 20 本の手があるのですか。ラーマの放った矢が彼の死をもたらしたのでしょうか。剣を持ったスグリーヴァなどは猿なのでしょうか、優れた人間なのでしょうか。ヴィビーシャナの魂は今でもヤマ王の支配下にはないのでしょうか。クンバカルナは 6 ヶ月間眠りから覚めないほど深く眠っていたのでしょうか。彼 (=クンバカルナ) は水牛千頭でも満足しなかったのでしょうか。皆虚偽をいっているのではないのでしょうか。ヴァールミーキやヴィヤーサに惑わされて、人びとが誤った教えの井戸に落ちてしまっているのではないのでしょうか。ガウタマよ、この世

界における純粹なパドマの物語を明らかにしてください。ジナがお示しになったとおりに私に語ってください。

*Mahāpurāṇa* 75.8

*tā hasiu pavaleṇa balirāyaputteṇa / saṃgāmapārambhapabbhārajutteṇa //1  
bhūyaraṇarīṇḍassa kiṁ tassa phira thāmu / tuhūm gaṇiu jagi keṇa anṇekku so rāmu //2  
jaiṁ atthi sāmatthu tā merugirittuṁgu / maiṁ jiṇiva raṇaramgi avaharahi māyamgu //3  
akkhivasi kiṁ mukkha pakkhiṇḍavarapakkha / kiṁ kuṇasi maiṁ kuii suggīvi parirakkha //4  
rattovalisehiṁ darisiyapahārehim / guṇadhammamukkehiṁ vammāvahārehim //5  
māraṇakaicchehiṁ dujjanasamāṇehim / tā be vi utthariya vippurhuriyabāhehim //6  
koḍīsarateṇaṁ nivvūḍhagāvāiṁ / chiṇṇāiṁ jamabhauhabhāvāiṁ //7  
anṇāiṁ gahiyāiṁ anṇāiṁ mukkāiṁ / ciṇghāiṁ ruddaddhayaṁdehim lukkaiṁ //8  
dhāvāṁta vevaṁta sarabhiṇṇa hilihiliya / aṁtāvalīkhaliya mahivīḍhi rulughuliya//9  
gayaghāyakaḍayaḍiya raha padiyajottāra / bhaḍa bhīma thiya be vi samgāmakattāra //10  
abbhiṭṭa te bāli lakkhaṇa mahāvīra / thirahattha susamattha suragirivarādhīra //11  
taḍidamḍasaralehiṁ taralehiṁ khaggehiṁ / saṁcaranapaisaraṇaṇīsaraṇamaggehiṁ //12  
khaṇakhaṇakhaṇaṇtehiṁ uggayaphuliṇgehiṁ / jigijigiyadhārāparajjiyapayaṇgehiṁ //13  
raṇasaravari hayamuhapheṇajali soṇiyadhadhāraṇālacakal /  
asicamcui lakkhaṇalakkhaṇiṇa todiu vālihim sirakamalu //ghattā*

そこで、戦闘を開始しようとしていた強力な王子ヴァーリンは笑った。その人間の王にどんな力があるのか。お前はそのラーマという者をこの世界におけるどんな者とみなしているのか。もしお前に力があるのなら、戦いで私に打ち勝ちメール山ほどの高さの象を持って行くがよい。愚か者よ、なぜヴィドヤーダラの側を攻撃するのか。私が怒りを向けるスグリーヴァをなぜ守るのか。血にまみれて、打ち倒そうという様子を見せ、美質も法もなく、鎧を引きちぎり、死を望み、悪漢にまで似たこの2人は震える矢の雨に捉えられた。何千万もの矢をヤマ神の眉をもっているような（ラクシュマナ）が余裕で碎き切り払った。一方が矢を放てば、一方がつかみ、恐ろしい半円型の矢で印がついた。走り、震え、射撃のためにバラバラになり、いななきをあげ、はらわたが大地に落ち、息も絶え絶えとなった。棍棒の打撃がとどろき、戦車からは戦車乗りが落下した。恐るべき二人の戦士は戦場で戦い続けた。強固な手を持ち、強力で、メール山のように勇敢なヴァーリンとラクシュマナは堂々とぶつかった。稻妻のように一直線でよく動き、集まり、入り、出て行く（二人の）剣でカンカンカンと音が鳴り、火花が飛び散り、キラキラ輝くこと太陽に勝るほどの剣で戦場という池に馬の顔をした泡が浮かんでいる。ヴァーリンの頭という蓮の花がラクシュマナという鳥の嘴で落とされた。

## 2.7. ジャイナ教説話のなかのラーマの位置づけ

クリシュナは比較的早い時期からネーミナータと関係づけられており、また説話内ではネーミナータの下位に位置づけられてきた。「バラデーヴァ・ヴァースデーヴァ・プラティヴァースデーヴァ」のなかでも、地獄に生まれ変わるヴァースデーヴァに配当されている。クリシュナの属するヴァースデーヴァの系列を殺生の罪を犯し地獄に転生するものと規定し、バラデーヴァと対比させているのは、祖師たるネーミナータとの対比が意図されていると推測される。図3のようにバラデーヴァとヴァースデーヴァの関係は祖師と転輪聖王の関係に対応している。

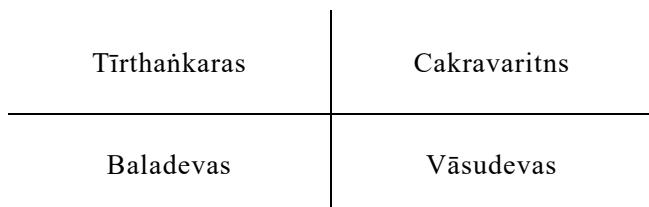


図3. 63 偉人の各カテゴリーの関係 [Cort 1993: 201] より

クリシュナが祖師との関係も考慮に入れながらジャイナ教の偉人の階層構造に組み込まれているのに対し、ラーマ物語は祖師などの他の偉人との関係が希薄である。ラーマ物語は祖師スヴラタの時代のこととされるが、スヴラタはクリシュナに対するネーミナータのような存在ではない。Jaini [1993:211] が述べているように、ジャイナ教説話においてラーマとクリシュナは対照的な取り扱いがなされている。ラーマはラーヴァナ殺害の役割をラクシュマナに移すことにより、殺生の罪から逃れられているのに対し、クリシュナはジャラーサンダ殺害の罪を犯し、地獄へと転生する運命にある。

ラーマ物語はジャイナ教説話の伝統において『パウマチャリヤ』以来重要な位置を占めるが、クリシュナ物語と比較すると、63 偉人の体系の中では比較的独立性が強い。様々な重要人物を整理するためのカテゴリーとして形成された 63 偉人だが、ジャイナ教説話の主たる構成として祖師と転輪聖王のような出家者と世俗の対比があるため、本来クリシュナ物語に由来する「バラデーヴァ・ヴァースデーヴァ・プラティヴァースデーヴァ」も出家と世俗の関係で捉えられ、ネーミナータと関係の深いクリシュナの属するヴァースデーヴァは世俗側とされた。ラーマ物語にはネーミナータのような出家側の重要人物がいないため、主要登場人物を「バラデーヴァ・ヴァースデーヴァ・プラティヴァースデーヴァ」に適用させる際に、ラーマを出家側に配置する必要があったものと推測される。そう仮定

するとラーマが関与する殺生のエピソードを改変した理由も理解できる。単にジャイナ教の教義に適合させるためと考えると、クリシュナ物語においてクリシュナによる殺害の挿話が採用されたままである説明がしにくく。

殺生の罪を犯すとバラデーヴァとして出家側に置くわけにはいかなくなるため、ヴィマラスーリはラーマによる殺生の描写を概ね改変したものと考えられるが、既に広まっている『ラーマーヤナ』の影響は大きく、『パウマチャリヤ』以外の作品ではヴァーリン殺害がそのまま残っていたり、殺害はしないまでも鹿狩りという行為が記されたままになっていたりというように改変が行き届いていないものもある。このことからも物語としての需要は大きいが、「バラデーヴァ・ヴァースデーヴァ・プラティヴァースデーヴァ」のカテゴリーで整理しきれない独立性の高いジャイナ教ラーマ物語の特徴を示していると思われる。

### 3. 祖師ネーミナータとクリシュナ

上で述べたようにラーマ物語は 63 偉人の他の偉人たちとの関係が比較的薄い。それに対し、クリシュナ物語は第 22 代祖師ネーミナータと深く結びつけられている。ネーミナータはジャイナ教徒による文学作品の題材として、かなり早い時期から伝記の形で取り扱われてきたが、特に 13 世紀以降、多くの作品の主題として取り上げられた。

元来、聖典に見られるネーミナータ物語の主眼は婚約者ラージマティーの懇願にもかかわらず、出家者としての生き方を選ぶネーミの決意の賞賛であった。だが、古グジャラート語などで著された作品、特にバーラマーサーやパーグ (phāgu) といった季節の描写を伴う形式による作品では、ネーミの婚約者であるラージマティーが行方不明となったネーミを想い悲しむ様子と、季節に応じた自然描写の融合に重点が置かれる。

ここでは [山畠 2017] をもとにネーミナータ物語の変遷について述べる。その変遷過程が良く現れる資料として『ウッタラッジャーヤー』の第 22 節、聖者伝文学としてジナセーナの『ハリヴァンシャプラーナ (Harivamśapurāṇa)』、バーラマーサーとしてヴィナヤチャンドラ (Vinayacandra, 12 - 13 世紀) の『ネーミナータ・チャトウシュパディカ (Nemināthacatuṣpadikā)』を示す。

#### 3.1. 聖典におけるネーミナータ物語

ネーミナータ物語の基本的な内容は『ウッタラッジャーヤー』に現れるものから大きく変わることはない。ネーミナータが出家を決意する箇所である 22.14-22 を抜粋する。

*Uttarajjhāyā 22.14-22*

aha so tattha nijjanto dissā pāñe bhayaddue /  
 vādehim pañjarehim ca sanniruddhe sudukkhie //14  
 jīviyantam tu sampatte māmsaḥā bhakkhiyavvae /  
 pāsettā se mahāpanne sārahiṁ iṇam abbavī //15  
 kassa aṭhā ime pānā ee savve suhesiṇo /  
 vādehim pañjarehim ca sanniruddhā ya acchahim //16  
 aha sārahī tao bhaṇai ee bhaddā u pāṇiṇo /  
 tujjhāṇ vivāhakajjammi bhoyāveum bahum jaṇam //17  
 soūṇa tassa vayaṇam bahupāṇivināṣaṇam /  
 cintei se mahāpanno sāṇukkose jiehiu //18  
 jai majjha kāraṇā ee hammanti subahū jiyā /  
 na me eyaṁ tu nissesam paraloge bhavissāi //19  
 so kuṇḍalāṇa juyalam suttagam ca mahāyaso /  
 ābharaṇāṇi ya savvāṇi sārahissa paṇāmae //20  
 maṇapariṇāme ya kae devā ya jahoiyam samoiṇṇā /  
 savvidhī saparisā nikkhamaṇam tassa kāum je //21  
 devamanussaparivudo sīyārayanam tao samārūḍho /  
 nikkhamiya bāragāo revayayaṇmi ḥio bhagavam //22  
 ujjāṇam sampatto oīṇo uttimāu sīyāo /  
 sāhassī parivudo aha nikkhamaī u cittāhim //23  
 aha se sugandhagandhie turiyam maukumcie /  
 sayam eva lumcaī kese pañcamuṭhīhim samāhio //24

(結婚式に向かう) 途中、ネーミは籠や囲いの中で怖がり苦しむ動物を見た。その肉のため、食事に供されるために生命の終わりを迎えようとしているのを見て、かの偉大なる聖者は御者に尋ねた。「何のためにこれらの幸福を求める動物たちは皆籠や囲いの中に閉じ込められているのか」御者は答えた「これらの動物たちは幸せです。あなた様の結婚式で多くの人々の食事としてふるまわれるのですから」「もし私を原因として多くの生命が殺されたならば、来世で私に幸福はないだろう」そして、その高名なネーミはイヤリングや紐などすべての装飾品を御者に与えた。ネーミが決意を固めたとき、ネーミの出家を祝福するために神々が慣例通り豪華に従者を引き連れて降下してきた。ネーミは神々や人々に付き従われ、素晴らしい輿に乗り、ドヴァーラカを発ち、レーヴァンタ山に登った。

これがネーミが出家する際の経緯となるが、そこに付隨するエピソードが作品によって異なり、またそのエピソードにこそ焦点が置かれていると思われる場合が多くある。そこで付隨エピソードの種類によってネーミナータを扱う作品を大きく3つに分類する。ネーミの弟ラタネーミとラージマティーのエピソードを主に扱うもの、ネーミの従兄弟に配されるクリシュナの物語が中核にあるもの、ラージマティーの別離の嘆きを扱うものの3つ

である。それぞれ作品のジャンルが異なり、ジャイナ教聖典、6-12世紀のチャリタ文学、12世紀以降のバーラマーサー等が配当される。

また、ネーミの妻となるはずだったラージマティーは最終的にはネーミのもとで出家することになるが、『ウッタラッジャーヤー』ではネーミが去った後、ネーミの弟であるラタネーミに言い寄られ、それを拒否するエピソードの記述がある。

*Uttarajjhāyā* 22.28-46

*soñña rāyakannā pavvajjam sā jiñassa u /  
nīhāsā ya nirāñandā sogēna u samutthiyā //28  
rāīmaī vicintei dhiratthu mama jīviyam /  
jā ham teñā pariccattā seyam pavvaium mama //29  
aha sā bhamarasannibhe kuccaphañagasāhie /  
sayameva luñcaī kese dhiimantā vavassiyā //30  
vāsudevo ya -añ bhañai luttakesam jiindiyam /  
sañsārasāgaram ghoram tara kanne lahuñ lahuñ //31  
sā pavvaiyā santī pavvāvesī tahiñ bahum /  
sayanam pariyanam ceva sīlavantā bahussuyā //32  
giriñ revatayam jantī vāseñullā u antarā /  
vāsante andhayārammi anto layañassa sā t̄hiyā //33  
cīvarāim visārantī jahā jāya tti pāsiyā /  
rahanemī bhaggacitto pacchā diñho ya tī vi //34  
bhīyā ya sā tahiñ dañhum egante samjayañ tayañ /  
bāhāhiñ kāu sañgoppham vevamāñtī nisīyāi //35  
aha so vi rāyaputto samuddavijayamgao /  
bhīyam paveviyam dañhum imam vakkam udāhare //36  
rahanemī ahañ bhadde surūve cārubhāsiñi /  
mamañ bhayāhi suyañu na te pīlā bhavissaī //37  
ehi tā bhunñjimo bhoe māñussam klu sudullañam /  
bhuttabhogī puño pacchā jiñamaggam carissamo //38  
dañhūna rahanemī tam bhaggujoyaparājiyam /  
rāīmaī asambhantā appāñam samvare tahim //39  
aha sā rāyavarakannā suñhiyā niyamavvae /  
jātī kulam ca sīlam ca rakkhamāñtī tayañ vae //40  
jai si rūvena vesamañ lalienā nalakuvvaro /  
tahā vi te na icchāmi jai si sakkham purandaro //41  
dhiratthu te jasokāmī jo tam jīviyakārañā /  
vantam icchasi āvāum seyam te marañam bhave //42  
aham ca bhogarāyassa tam ca si andhagavañhiño /  
mā kule gandhañā homo samjamam nihuo cara //43  
jai tam kāhisi bhāvañ jā jā dacchasi nārio /  
vāyāiddho vva hañho añhiappā bhavissasi //44  
govālo bhañdavālo vā jahā taddavvañissaro /*

*evaṁ aṇissaro taṁ pi sāmaṇṇassa bhavissasi //45  
tīse so vayaṇaṁ soccā samjayāe subhāsiyam /  
aṅkuseṇa jahā nāgo dhamme sampaṭivāio //46*

ラージマティー王女はジナ（ネーミ）の出家を聞いて笑顔も喜びもなくなり、悲しみに覆われた。ラージマティーは思った。「私の人生はどうなるのでしょうか。私はネーミ様に捨てられてしまった。私も出家した方がよいのではないか」

そして、蜂のように黒く、櫛とブラシで整えられた髪を決然とむしりとった。そしてヴァースデーヴァは髪をむしり取り、感官を制御した彼女に言った。「王女よ、恐るべき輪廻の海をたやすく渡ってしまいなさい」敬虔で知識豊かな彼女が出家し心穏やかになると、多くの親族や従者たちも出家することとなった。

レーヴアンタ山に行く途上、雨のせいで衣服の中までびしょ濡れになり、暗闇の中、洞窟の内部に留まることになった。衣服を脱ぎ、生まれたままの姿になったところをラタネーミが目撃し、平常心が失われてしまった。それから彼女も彼に気づいた。彼女はそこで目撃され、一人でその出家者ということに恐怖を感じた。両腕を首飾りのように身体に巻き付け（？）震えて座り込んだ。そこでサムドラヴィジャヤの王子は恐れ震えている彼女を見て、こう言った。「私はラタネーミです。美しく、甘美な言葉を持つお方よ。私を受け入れてください、細身のお方よ。あなたにとって苦しみとなることはないでしょう。さあ、楽しみを享受しましょう。人間として生まれるのは得がたいことです。楽しみを享受してから、ジナの教えに従いましょう。」

ラタネーミが義務を忘れ、劣情に身を任せているのを見て、それでもラージマティーは慌てず、自己を保っていた。誓いに忠実で、自身の生まれも一族も戒律も守る大王の娘はラタネーミに言った。「仮にあなたの見た目がヴァイシュラマナであったり、所作がナラクーバラのものであったり、インドラのように見えても私はあなたを求めません。なんてことでしょう。名声を求めるお方よ、生きるために吐瀉物を飲むようならば、死なれたほうがよいのではないでしょうか。私はボーガ王の子孫です。あなたはアンダカヴリシュニー王の子孫でしょう。ガンダナ蛇を一族に献げないようにしましょう。自制をしっかりと行いましょう。あなたがどんな女性を見ても思いを打ち明けてしまうならば風に吹かれるクレソンのように信仰を保持できなくなるでしょう。牛飼いや倉庫番はその管理するものを所有してはいないように、あなたも出家者としての資格を所有しているわけではないのです」彼女の言葉を聞いて、鉤で象が操られるように法のもとへ戻っていった。

### 3.2. クリシュナ物語との融合

ジャイナ教聖典の『アンタガダダサーオー』にクリシュナ（Kāñhe Vāsudeve）は登場する。そこではネーミナータ（Ariṭṭhanemi）がクリシュナの宮廷に現れ、王妃たちを出家へと導きクリシュナ自身も出家する。[Barnett, 1907] の英訳を参照。

*Antagadadasāo 5.1.9*

*tae ḥam kañhe vāsudeve arahaṁ arīṭhaṇemim vaṇḍai namamsai, vaṇḍittā namamsittā evaṁ vayāstī imīse ḥam bhante bāravaīe nagarīe navajoyaṇavithiṇīā jāva devalogabhūyāe kiṇṇmūlāe viṇāse bhavissai //*

そこでクリシュナ・ヴァースデーヴァはアリシュタネーミを讃え、敬礼してこう言った。「尊者よ、なぜこの9ヨージャナの広さを持つ天界の如きドゥヴァーラヴァティーが破壊されるのか」

*Antagadadasāo 5.1.25*

*tae ḥam se kañhe vāsudeve paumāvaiṁ deviṁ paṭṭayaṁ duruhei, aṭṭhasaenam sovaṇṇakalasāṇam jāva mahāṇikkhamāṇabhisēṇam abhisimcai, abhisicittā savvālaṇkāravibhūsiyam karei, karettā purisahassavāhiṇim sibiyam duruhāvei, duruhāvettā bāravaīe nayarīe majjhāṇmajjhēṇam niggacchai, nigghacchittā jeṇeva revayae pavvae jeṇeva sahasaṁbavaṇe ujjāṇe teṇeva uvāgacchai //*

そこでクリシュナ・ヴァースデーヴァは王妃パドマーヴァティーを王座に昇らせ、大灌頂の儀式を行うかのように108の瓶の黄金を注ぎ、あらゆる装飾品で飾り、千人で担ぐ輿に載せ、ドゥヴァーラヴァティーの町の中心へ行かせた。それからレーヴァンタ山、サハサンバヴァナ園へと近づいた。

ここでは既にネーミナータ、クリシュナ、そしてネーミナータと関わりの深いレーヴァンタ山（ギルナル山）が登場している。

6世紀から12世紀にかけてラーマ物語のようなジャイナ教外の要素がジャイナ教に採り入れられるようになると、クリシュナはネーミの従兄弟に配置され、63偉人中のヴァースデーヴァの一人となる。あくまでもネーミはクリシュナの上位にたつエピソードが多いが、カンサ殺しやジャラーサンダ殺しなどクリシュナに付随したエピソードがネーミナータ物語の多くを占めるようになる。この時期の主だった作品としては『ハリヴァンシャプラーナ』の他にも『マハープラーナ』やスヴァヤンブー（Svayambhū, 9-10世紀）による『リッタネーミチャリウ（Riṭṭhanemicariu）』などがあるが、どれも同様の記述をしている。クリシュナとネーミナータの関係性を表すエピソードとして2人の腕相撲についての記述

がある。

*Harivamśapurāṇa* 55.9-12

iti niśamya vaco 'tha niśāmya tam smitamukho harir iśam uvāca saḥ /  
 kim iti yuṣmadudāravapurbalaṁ bhujaraṇe bhagavan na parīkṣyate //9  
 saha mamābhinayorddhvamukho jinah kim iha malla-yudheti tam abravīt /  
 bhujabalaṁ bhavato 'praja budhyate calaya me caraṇam sahasāsanāt //10  
 parikaram parivadhyā tadottitho bhujabalaṇa jinasya jigīṣayā /  
 calayitum na śāśāka padāñgulipramukham asya nakhendudharam hariḥ //11  
 śramajavārilavāñcitavagrahah prabalaniśvasitocchvasitānanah /  
 balam aho tava deva janātigam sphuṭam iti smayam uktam uvāca saḥ //12

そう聞いて、そのネーミを見て微笑んで、（クリシュナは）言った。「もしあなたの素晴らしい身体の力が腕相撲でお試しできないということがありますか」ジナ（＝ネーミ）は身体を動かして顔を上げて言った。「私と腕相撲というのはどのようにするのでしょうか。私に腕力があることを知ろうとするならば、その座席から私のところに即座に来てください」そこで腰紐を締めて、腕力でジナ（＝ネーミ）を打ち倒そうとクリシュナが立ち上がった。しかし爪が月のようなその足の指の一本も前に出すことはできなかった。身体中が激しい汗の滴にとりまかれ、激しく呼吸した。「確かにあなたの力がものすごいことがわかった」と驚きの言葉を発した。

### 3.3. ラージマティーとバーラマーサー

『ネーミナータ・チャトゥシュパディカ』（13世紀）は、暦の各月と季節描写をもとに作られるバーラマーサーのカテゴリーに含まれる。この作品は北インド西部におけるバーラマーサーのもっとも古い作品の1つであり、特に男女の別離をテーマとするものとしてはおそらく最初のものである。下記和訳には〔Paniker, 1999; Vaudeville, 1986〕を参照した。

*Nemināthacatuṣpadikā*

sohagasumdaru ghaṇalāyannu sumaravi sāmiu sāmalavannu /  
 sakhi pati rājala caḍi uttariya bāramāsa suṇi jima bajjariya //1  
 nemikumaru sumaravi giranāri siddhī rājala kannakumāri // āṅkiṇī  
 śrāvaṇi kaḍuyām mehu gajjai virahiri jhijjhāi dehu /  
 vijju jhabakkai rakkhasi jeva nemihī viṇu sahi sahiyai kema //2  
 sakhī bhaṇaisāmīni mana jhūri dujjanataṇā ma vaṇchita pūri /  
 gayau nemi tau viṇaṭhau kāi achai anerā viraha sayāi //3  
 volai rājala tau ihu vayanu natthī nemisamaṇ vararayaṇu /  
 dharai teju gahaganasavi tāva gayaṇi na uggai diṇayaru jāva //4  
 bhādravi bhariyā sara pikkhevi sakaruṇa roai rājaladevi /

*hā ekalađī mai niradhāra kima ūvešisi karuṇāsāra //5  
bhaṇai sakhī rājala mana roi nīthuru nemi na appaṇu hoi /  
simciya taruvara pari palavam̄ti girivara puṇha kada derā hum̄ti //6  
sācaūṇi sakhi vari giri bhijjam̄ti kimai na bhijjai sāmalakam̄ti /  
ghaṇa barisamtai sara phuṭṭam̄ti //7  
āsā māsaha aṁsupravāha rājal milhai viṇu namināha /  
dahai caṇḍu caṇḍaṇa himasū viṇu bhattāraha sau vivarīu //8  
sakhi navi khīnā nemihī resi mana āpaṇapauṁ tauṁ khaya nesi /  
jiṇi dikkhādiu pahirauṁ chehu na gaṇiu at̄hasaisau kiyau vihādu //9  
nemi dayālū sakhi niradosu kījai ugrasiṇāūpari roosu /  
pasuyabharāvīu mūkau vāḍu mujha priyasarisaru kiyau vihādu //10*

- (1) 幸福で美しく彩られ、美しさに満ちた、青黒いお顔の主を思い起こし、バーラマーサーの形でラージャル（＝ラージマティー）が友に語る言葉を聞きなさい。（くり返し） ラージャル王女はネーミ王子を想って、ギルナール山で成就者となったのだ。
- (2) シュラーヴァナ月には雨雲が激しくとどろき、別離の悲しみで身を焦がす。稻妻がラークシャシーのように光る。「ネーミ様なしで、友よ、どうすれば耐えられるだろうか」(3) 友人は言った。「思い悩まないでください。主人よ。悪人の望みをかなえさせることなどありません。ネーミ様は去ってしまわれました。それで何がいけないのでしょう。他にも何百と結婚相手はいらっしゃいます」(4) ラージャルは言った。「宝石にも等しいネーミ様のような素晴らしい方は他にはいません。太陽が空に昇らない限り、惑星や星々が光り輝くようなものです」(5) バードラ月には水をたたえた池を見て、ラージャルは哀れに泣く。「ああ、なぜ私を寄る辺のないまま一人にして置いていたのですか。哀れみ深き方よ」(6) 友人は言った「ラージャル様、お泣きにならないでください。恥知らずのネーミ様はもう私たちのもとにはおりません。水につかった樹木は再び芽吹きますが、峨々たる山は力強く恐ろしいままです」(7) 「友よ、あなたは正しいかもしれません。しかし山は濡れるとしても、なぜかかの青黒く美しい方は濡れることはできません。大雨が降ると池程度ならもたないけれども、大海は洪水が来ても揺れることもないのです」(8) アーシュヴィン月には、ラージャルはネーミナータがいないためたくさん涙を流した。「月もチャンダナの雪のような冷たさも夫がいなくては逆に焼け付く熱さを持つのです」(9) 「友よ、ネーミ様のために気を落とさないでください。ご自身の心をダメにしないでください。ネーミ様がはじめて示した裏切りで、八回生まれ変わっても続く愛情が数えられなくなつたのですから。
- (10) 「ネーミ様は慈悲深い方です。友よ、あの方は悪くありません。父ウグラセーナ王に対して怒っているのです。設けられた囲いが家畜で満たされていたため、私の夫となるべき方は離れていました。

kattiga kṣitiga ūgai samjha rajamati jhijhiu hui atijhamjha /  
 ratidivasu achai vilavanta vali vali daya kari daya kari kamta //11  
 nemitañi sakhi mūkina āsa kāyaru bhaggau so gharabāsa /  
 imai isī sanehala nāri jāi koi chañdavi giranāri //12  
 kāyaru kima sakhi nemijinamdu jini rañi jittau lakkhu nariñdu /  
 phurai sāsu jā aggali nāsa tāva na milhauñ nemihī āsa //13  
 magasiri maggu paloai bāla iñā pari pabhañai nayañavisāla /  
 jo mai melai nemikumāra tasu ḥīvela vahau savivāra //14  
 ehu kadāgrahu tau sakhi milhi karisi kāi tiñi nemihī hilli /  
 mañdi cañāviu jo kira māli he he kukarai ṭohanakāli //15  
 aṭha bhava seviiu sakhi mai nemi tamu ūmāiu kima na karemi /  
 avagannesai jai mai sāmi laggī achisu toi tasu nāmi //16  
 posī rosa savi chīmḍivi nāha rākhi rākhi mai mayañaha pāha /  
 pañdai sīu navi rayañi vihāi lahiya chidda savi dukkha amāi //17  
 nemi nemi tu karatī muddhi juvvañu jāi na jiñisi muddhi /  
 purisarayañabhariyau samsāru parañi anerau kui bhattāru //18  
 bholii tau sakhi kharii gamaari vari acchañtai nemikumāri /  
 annu purisu kui appanū nañdai gai varu lahiu kurāsabhi cañdai //19  
 māha māsi mācrai himarāsi devi bhāñai mai priya lai pāsi /  
 tai viñu sāmiya dahai tusāru navanavamārihi mārai māru //20

(11) カールッティカ月にはクリッティカーの星々が薄暮時に昇る。やつれたラージャルは痩せ細ってしまった。彼女は夜昼問わず泣き続けた。「夫よ、絶えることなくお恵みをください」(12)「友よ、ネーミ様のお帰りはお望みにならないでください。あの臆病なお方は住処から逃げてしまわれたのです。一体誰がこの愛すべき女性をこんな風にうち捨ててギルナール山に行ってしまうでしょう」(13)「友よ、戦場で多くの王に勝利したネーミ様のことをどうして臆病というのですか。この鼻から呼吸が続く限り、ネーミ様への希望は捨てません」(14)マールガシールシャ月にも少女は道を眺めている。この目の大きな少女はこう言った。「私にネーミ王子を会わせてくれる人がいたならば、その人にいつでも何でも(?)して差し上げます」(15)「そのような頑迷さはお捨てなさい、友よ。あのネーミ様に対して何をなさるのですか、友よ。強引にやぐらに登らせても誰が声をあげて鳥を追い払うでしょうか」(16)「友よ、私はこれまで八度の生をネーミ様に仕えてきたのです。どうしての方のことを望まないことがありますか。もし夫が私を相手にしないとしても、私は彼の名にすがり続けるでしょう」(17)「パウシャ月にはすべての怒りを捨てて私をマダナのくびきから救ってください。寒気が来ると夜は終わることがなく、すべての過ちと苦しみが一度に来てしまう」(18)あなた様はネーミ様、ネーミ様と呼び続けて愚かにも若さが去つて行くのを知らないのですか、純真なお方よ。この世は宝石のような男の方たちで満

たされております。他のどんな方とでも結婚なさればよろしい」(19) 友よ、そんなことを言うなんてなんと愚かなのですか。ネーミ王子が夫であるのに他のどんな方が私の障害となるでしょう。象に乗っているのに誰がロバに乗り換えるでしょう」(20) マ一ガ月には寒気は強まり、ラージャルは言う。「愛しい方よ、私をあなたのものとへ連れて行ってください、あなたなしでは、夫よ、寒さが私を痛めつけ、マーラが私を何度も打ちたたくのです」

*ihu sakhi roisi sahu aranni hatthi ki jāmai dharaṇau kanni /  
tau na patījasi māharī māi siddhiramaṇirattau nemi jāi //21  
kaṇti vasamtaī hiyaḍāmāhi vāti patījaum kima hala sāi /  
siddhi jāi tau kāi ta bauha sarasī jāu ta ugraseṇadhiya //22  
phāguṇa vāguṇi panna padamti rājaladukkhi ki taru royamti /  
gabbhi galivi haum kāi na mūya bhaṇai vihamgala dhāraṇidhūya //23  
ajiu bhaṇiu kari sakhi achai bhalā vara nemihī pāsa /  
anu sakhi modaka jau navi dhuhiya suhālī ki na ruccamti //24  
maṇaha pāsi jai vahilau hoi nemihī pāsi tatalau na koi /  
jai sakhi varauṇ ta sāmaladhīru ghaṇavīṇu piyai ki cātaku nīra //25  
caitra māsi vaṇasai paṇgurai vaṇi vaṇi koyala tāhakā karai /  
paṇcabāṇa kari dhanuṣa dharevi vejhāi māmādī rājaladevi //26  
jui sasi mātau māsu vasamtu iṇi khilījjai jai hui kaṇtu /  
ramiyai navanava kari siṇagāru lījjai jīviyajubbaṇausāru //27  
suṇi sakhi māniu mujhu pariṇayaṇu navi ūvari thiu vaṇdhava vayaṇu /  
jai padivannai cukāi nemi jīviya juvvaṇu jalani jalemi //28  
vaisāha ha vihasiya vaṇarāi mayaṇamittuṇ malayānilu vāi /  
phuṭti ri hiyaḍā mājhī vasamtu vilavai rājala pikkhīu kaṇtu //29  
sakhī dukkha vīsarivā bhaṇai sabhali bhalarau kima runajhūṇai /  
dīsa paṇca thiru jovvaṇu hoi khāu piyau vilasau sahukoi //30*

(21)「あなたは森の中で泣いているようなものです。耳をつかんだところで一体誰が象を操れましょうか。わが母よ、お信じにならないかもしれません、成就という喜びに捕らわれているネーミ様は去ってしまったのです」(22)「愛しい友よ、私の心にもうお住みになっているのに、どうしてそのような言葉を信じられるでしょう、ああ友よ。あの方が成就に至ったのかという不安などありません。ウグラセーナの娘としてふさわしくあろうとするだけです」(23) パールグナ月には木々の葉が落ちる。ラージャルの苦しみを見て木々が泣いているようだ。ダーラニーの娘は悩み苦しんで語る。「友よ、(なぜ) 私は母の胎内で死ななかったのだろう」(24) 今まさに、私のすることを聴いてください、友よ、よく考えてください。ネーミ様のような良い夫はまだいます。だから、友よ、モーダカがないときでも空腹ならばプレーが食べられるのです」(25) 思考と同じくらい早く動いたとしてもネーミ様と同等の方はおりません。友

よ、もし私が結婚するなら、青黒いお顔の方とします。チャータカ鳥が雲がないからといってただの水を飲むでしょうか」(26) チャイトラ月には林の中で花が咲き、その木々ではコーキラ鳥が鳴いている。(カーマが) 五本の矢を作り、弓を持って着飾ったラージャルを狙っている。(27) 「見てください、友よ、この盛り上がる月には愛する人がいる場合には、ヴァサンタが歌われます。愛の歌が次々と新たに歌われ、生命と若さの最上の部分を享受するのです」(28) 「お聞きなさい、友よ。私との結婚を約束されたのですから、結婚して一族となる誓いを取り消すことはございません。もし、ネーミさまが約束に背かれたなら生命も若さも炎で燃やしてしまいます」(29) ヴァイシャーカ月には木々に花が咲き、マダナの友人であるマラヤの風が吹きそよぐ。ラージャルは愛する人を思い浮かべながら、心中でヴァサンタを奏でつつ、「心臓がはじけてしまえばよい」と嘆き叫ぶ。(30) 友は苦しみを忘れさせようとしてこう言った。「聞いてご覧なさい。蜂がどれほどはばたいているかを。本当に若い時期はあと5日も残っておりません。皆に食べさせ、飲ませ、楽しませましょう」

*ramaṇi pasāmsai rājalakanna jīha kaṇtu vasi te para dhanna /  
jasu priu na karai kimai sā haum ikka ja bhūmḍanilādi //31  
jīṭhua virahu jima tappai sūru ghaṇaviogi susiyam naipūru /  
pikkhiu phulliu cāmpaivilli rājala mūchī nehagahilli //32  
mūchī rāṇī hā sakhi ghāum paḍiyau khaṇḍai jevaḍu ghāu /  
hariya mūcha cāmḍaṇapavaṇehim sakhi āsāsai priyavayaṇehim //33  
bhaṇai devi viratī saṃsāra paḍikhi paḍikhi mai jādavasāra /  
niya paḍivannauṁ prabhu saṃbhāri mai lai sarisī gadhi girināri //34  
āsāḍhaha didhu hiyaum karevi gajju vijju savi avagannevi /  
bhaṇai vayaṇu ugraseṇaha jāya karisu dhammu sevisu priyapāya //35  
miliu sakhi rājala pabhanāṇti ciṇaya jema na mirīya khajjaṇti /  
augī acchi sakhi jhakhi tapu dohillau taum sukumāla mana āla //36  
aṭha bhava vilasiu priyaha pasāi kimai jīvu sakhi sukhaha na dhrāi /  
hiva priya sarisaum jīviyamaraṇu iṇa bhavi parabhavi nimi ju saraṇu //37  
adhiku māsu savi māsahi phirai chaharitukerā guṇa aṇuharai /  
milivā priya ūbāhuli hūya sau mukalāvi ugrasenadhūya //38  
paṇca sakhiṣai jasu parivāri priyaūmāhī gai girināri /  
sakhiṣahita rājala gunarāsi lei dikkha paramesarapāsi //39  
nimmala kevalanāṇu lahemvi siddhī sāmiṇi rājaladevi /  
rayaṇasimhasūri paṇamavi pāya bārai bāsa bhaṇiyā mai bhāya //40*

(31) ラージャルは少女たちを褒め称える。「少女たちに祝福あれ。愛する人がなぜか面前に現れない、そんな私一人だけが不幸です」(32) ジェート月には別離の苦しみが太陽のように焼け付く。水で満ちた川が雲から離れてしまい乾ききった。チャンパカやベルノキが花開いたが、ラージャルは思慕の苦しみから気を失ってしまった。(33)

「王女様が気を失ってしまわれた。ああ、みなさん、頭をひどくぶたれたように崩れ落ちました」気絶したラージャルはチャンダナと扇で気を取り戻し、友人たちが優しい言葉で慰めた。(34) ラージャルは言った。「私はあなたを待ち続けた結果、世俗の喜びを厭うようになりました、ヤーダヴァ族の最良の方よ、主よ、ご自身のお約束を果たしてください。私と一緒にギルナール山へ連れて行ってください。(35) アーシャーダ月には決心を固め、雷鳴も稲光も何も気にせず、ウグラセーナの娘は言った。「出家いたします。愛する人の足下に仕えようと思います」(36) ラージャルが友人たちに会うと彼女らは言った。「胡椒はチャナ豆のようには食べられません。お黙りください。ああ、愚かなことを仰らないでください。苦行は困難ですし、あなた様はか弱い方なのですから」(37) 「八度の生において愛する人のご好意のおかげで何とか生を享受していますが、だが友よ、幸せではないのです。今は愛するお方とともに生き、また死にたいのです。現世も来世もネーミ様こそが住処なのです」(38) 閏月はすべての月を移ろう。6つの季節の特徴を持つ。愛するお方と会うことを強く望み、ウグラセーナの娘はすべてをうち捨てた。(39) 五百人の友人を伴って、夫に会うことを望む彼女はギルナールに向かった。美德の宝庫であるラージャルは友人とともにネーミのもとで出家の儀式を行った。(40) 成就者となったラージャル王女は汚れのない独覚知を得た。ラヤナシンハの足下に敬礼して、このバーラマーサーを作りました。みなさま。

### 3.4. ネーミナータ物語の変化

ネーミナータ物語の変化を見ていくと、ネーミナータよりもむしろラージマティーの位置づけが変化している。[Kelting, 2009] が指摘するように、現代のジャイナ教では代表的な貞女 (*satī*) の一人として挙げられるラージマティーであるが、少なくとも『ウッタラッジャーヤー』では自身を吐瀉物に比していたり、ネーミナータへの直接的な愛情表現がないことから、ラージマティーからネーミナータへの貞節さというのはことさらに表現されてはいない。またクリシュナ物語と融合した際も、例えばラージマティーをネーミナータの結婚相手として推薦したのはクリシュナの妻たちであったという挿話のように、周囲の行為に振り回されている印象が強い。ただチャリタ文学でも12世紀のヘーマチャンドラの『六十三偉人伝』のような時代の下った作品ではラージマティーと女友達の会話が登場し、ネーミを追う動機付けが設定されている。それがバーラマーサーになると、ネーミが去ったあとのラージマティーの心境変化のみに焦点を当てている。貞女としての位置づけはバーラマーサーが作られた頃には概ね確立していたと思われる。

ただ、十二ヶ月および季節描写とネーミナータ物語の結びつきがどのように行われた

かは未だ推定しがたい。だが、バーラマーサーが書かれ始めたのと近い時期に作られた『レーヴァンタギリラース (*Revantagirirāsu*)』などの巡礼地をテーマとしたラーソー作品は、巡礼による移動の増加が「別離」に関連すること、また聖地の描写として複数の季節を含んでいるという記述があるという2つの点から示唆的である。

#### 4. 聖地称揚文学の登場

ネーミナータ物語がラージマティーの物語へと変容していくのと同時期にジャイナ教の聖地とされる場所を称揚する文学作品が複数登場する。初期のものとしては13世紀に作られたラーソー形式による作品がある。主題はネーミナータが出家して登ったギルナル山（レーヴアンタギリ）やリシャバが出家したアーブー山である。

*Revantagirirāsu* 1.1-8

*paramesaratitthesaraha payapañkaya pañamevi /  
bhañisu rāsu revantagire añbikadivi smarevi //1  
gāmāgarapuravanagahanasarisaravari supesu /  
devabhūmi disi pacchimaha mañaharu sorañhadesu //2  
jiñu tahim mañdalamañdañau maragayamaudamahañtu  
nimmalasāmalasiharabhare rehai giri revamtu //3  
tasu siri sāmiu sāmalau sohagasumdarasāru /  
jāivanimmalakulatilau nivasai nemikumāru //4  
tasu muhadañsañu dasadisi vi desadesamtaru sañgha /  
āvai bhāvarasālamanañau hali ramgataramta //5  
poruyādakulamamdañau namdañu āsārāya /  
vastupāla varamamti tahim tejapālu dui bhāya //6  
gurajaratradharadhuri dhavalaki vīradhavadavarāji /  
bihu bamdhavi avayāriyau sūmū dūsamamājhi //7  
nāyalagacchaha mamdañau vijayaseñasūrirāu /  
uvaesihi bihu narapavare dhammi dhariu diñhu bhāu //8*

西の地方には神々の土地のような素晴らしいサウラーシュトラ地方がある。そこにまるでよくできたエメラルドの王冠をもっているかのような美しい土地があり、汚れなく青黒い頂による魅力を増す土地にレーヴアンタ山がある。そこに幸福で美しく彩られた青黒い顔の、汚れのない栄光のヤーダヴァ族のネーミ様がいらっしゃる。そこに各地からネーミ様のお顔を見ようとする人々が来ている。信仰心と情熱をたたえた心をもち、愛情の波しぶきをあげながら。ポーラヴァーダー族の誉れであるアシュヴァーラージャの息子にして優れた宰相であるヴァストゥパーラとテージャハパーラの二兄弟はそこにグルジャラの地の主であり、ドールカーに居を構えるヴィーラダヴァーラ

王の下、このドゥフシャマの時代に美しい二兄弟が降りてきた。その二兄弟が教説によって最上の人びとの中でも（最も）強固に教えを守るようになったことをナーヤラ・ガッチャの誉れであるヴィジャヤセーナスーリが記した。

#### *Revantagirirāsu 2.9*

*ahiñahu nemijinimda tiñi bhavañu karāviu / nimmalu cañdaru bimbe niyanāum lihāviu / thoravikkhambhavāyambharamāulam / mañdapu dañdaghañu tumgataratorañam / dhavaliya vajjhīrūñajhañirikimkañighañam / ikkārasayasahū pañcāsiya vacchari / nemibhuyañu uddhariu sājañi narasehari // 2.9*

彼（サージャン）によってネーミ様の新しい寺院が建てられた。汚れなく美しく、ネーミ様自身のお名前が刻まれている。強固な柱の部分は美しく、美しい彫像と多くの瓶で埋め尽くされている。多くの支柱でできた会堂には高いアーチがあり、白く輝き、内部ではたくさんの鐘が響いている。1185年（1128-29 CE）にネーミ様の寺院は人中の獅子たるサージャンによって建て直された。

#### *Revantagirirāsu 4.20*

*rañgihu e ramai jo rāsu sirivijayaseñisūri nimmaviu e / nemijinu tūsai tāsu ambiña pūrai mañi ralī e //*

ヴィジャヤセーナスーリが著したラーサを観衆の前で踊れば、ネーミに満足され、アンビカは心喜ぶ。

#### *Ābūrāsu 7-8*

*vimalihim thavyau pāvanikamdo tahichai sāmiu risahajiñimdo / sānidhu samghaha karai samkhevī tahi chai sāmiñī kahau vicārī // 7 puruva pacchima dhammiya tahim āvahim uttara dākhiña samghu jiñavaru nhāvahi / pekhahi mañdiru risaha ravannā / nācahi dhammiya vahugunavannā // 8*

そこにはヴィマラによって罪業を滅する祖師リシャバの寺院が建てられ、サンガの助けによって速やかにアンバーの寺院も建てられた。東西にいるジナの教えに従う者たちよ、ここに来なさい。南北のサンガの者たちよ、ジナ（像）を浄めよ。多くの美德をもつジナの教えに従う者たちよ、リシャバの寺院を歌いながら見て踊りなさい。

これらの作品は 12 世紀から使用が確認される古グジャラート語で書かれており、具体的な聖地を主題としていることとも相まって、チャリタ文学に比べて、グジャラート地域と密接に結びついていると見なすことができる。このことはジャイナ教文学が普遍的なジャイナ教の歴史やジャイナ教の教義よりも、個別的な地域や集団を念頭において作成され

ていると解釈することができる。このことは同時期に形成されていくジャイナ教団のガッチャの性質とも関係が深いものと思われる。

## 5. ジャイナ教団の変化

ジャイナ教団の性質の変化、名称としてはガナ(gana)やクラ(kula)からガッチャ(gaccha)への変化は歴史的に見てジャイナ教聖者伝文学においてチャリタ文学からラーソーなどの文学への移行の時期とおおむね同時期である。聖者伝文学の変化との関係が推測されるジャイナ教団の変化について確認していく。

### 5.1. 古代ジャイナ教の教団と中世以降の教団

ジャイナ教団の組織体としてはガナ(gana)、クラ(kula)、サンボーガ(sambhoga)が古くから存在したとされている。ガナについての記述は『カルパストラ』などに見られる。

*Kalpasūtra, Sthavirāvalī, 1-2*

*teṇam kāleṇam teṇam samaṇam samaṇassa bhagavao mahāvīrassa nava gaṇā ikkārasa gaṇaharā hotthā.*  
*'se ken' attheṇam bhamte evam vuccai: samaṇassa bhagavao mahāvīrassa navaganā ikkārasa gaṇaharā hotthā?"samaṇassa bhagavao mahāvīrassa jetṭhe imdabhūt aṇagāre goyamagotteṇam pañca samaṇa-sayāim vāei;*  
*majjhimae aggibhūt aṇagāre goyamagotteṇam pañca samaṇa-sayāim vāei; kaṇiyase aṇagāre goyama-gotteṇam pañca samaṇa-sayāim vāei; there ajja-viyatte bhāraddāe gotteṇam pañaca samaṇa-sayāim vāei; there ajja-suhamme aggivesāyaṇa-gotteṇam pañca samaṇa-sayāim vāei; tehere maṇḍiyaputte vāsiṭṭhagotteṇam addhuṭṭhāim samaṇa-sayāim vāei, there moriyaputte kāsava-gotteṇam addhuṭṭhāim samaṇa-sayāim vāei; there akampie goyamagotteṇam there ayalabhaṭṭā hāriyāyaṇa-gotteṇam, te dunni vi therā tinni 2 samaṇa-sayāim vāemti, there meyajje there pabhāse, ee dunni vi therā koḍinna-gotteṇam tinni 2 samaṇa-sayāim vāemti. se teṇam attheṇam, ajo! evam vuccai?' samaṇassa bhagavao mahāvīrassa nava gaṇā ikkārasa gaṇaharā hotthā"savve ee samaṇassa bhagavao mahāvīrassa ikkārasa vi gaṇaharā duvālas'aṃgiṇo cauddasapuvviṇo samatta-gaṇi-piṭaga-dhāragā rāyagihe nagare māsiṇam bhatteṇam apāṇaeṇam kāla-gayā jāva savva-dukkha-ppahīnā. there imdabhūt there ajja-suhamme siddhi-gae mahāvīre pacchā dunni vi therā parinivvuyā; je ime ajjattāe samaṇā niggamthā, ee savve ajja-suhammassa aṇagārassa avaccejā, avasesā gaṇaharā niravaccā vocchinnā.*

当時、尊者マハーヴィーラのもとには9つのガナと11人のガナダラがいた。「なぜ尊者マハーヴィーラのもとには9つのガナと11人のガナダラがいたのですか」「尊者マハーヴィーラには最年長の弟子として500人の出家者を率いるガウタマ氏族のインドラブーティ、中堅として500人の出家者を率いるガウタマ氏族のアグニブーティ、

最年少として 500 人の出家者を率いるガウタマ氏族のヴァーユブーティがいる。また……ヴィヤクタ……スダルマン……マンディカプトラ……マウリヤプトラ……アカンピタ……アカラブラートリ……メーターリヤ……プラバーサがいる」

この出家者にして尊者のマハーヴィーラのこの 11 人のガナダラは皆 12 のアンガ聖典、14 のプッヴァ聖典を含む全ての聖典に通じ、ラージャグリハで 1 ヶ月間水を飲むことなく断食を行い、全ての苦を離れて亡くなったのである。長老のインドラブーティとスダルマンはマハーヴィーラの入滅の後に亡くなった。現在のジャイナ教の出家者たちは全てスダルマンから発しており、他のガナダラたちから発した者たちはおらず、散り散りになってしまった。

ガッチャが具体的な教団の単位と見なされるようになるのは 11 世紀以降であるが、聖典や注釈文献など、より早い時代のものにも「ガッチャ」という用語自体はいくつかみられる。しかし、現代のような大規模なものではなく、教団内の小さな単位と見なされていたようである。7-8 世紀の『ヴィヤヴァハーラバーシュヤ』(*Vyavahāra Bhāṣya*)に集団の単位としてのガッチャが現れている。

*Vyavahāra Bhāṣya* 1731a

*paṇago va sattago vā, kāladuve khalu jahannato gaccho /*

5 人の場合と 7 人の場合の二つの場合がある。それが最小人数のガッチャである

## 5.2. タパー・ガッチャ (Tapā Gaccha)

タパー・ガッチャ<sup>4</sup>は 1229 年にジャガットチャンドラ (Jagatcandra) が創始したとされる。タパー（苦行者）の名称はメワールのジャイトラシンハ王 (Jaitrasiṁha, 1214-1253) から授与される。15 世紀のムニスンダラスーリ (Munisundarāśūri) によるタパー・ガッチャの指導者の伝記集である『グル・アーヴァリー』(*Gurvāvalī*) の記述を挙げる。

*Gurvāvalī* 80-92

*abhūt tad ullāsanalālasodayo vineyavṛttir maṇiratnasadguroḥ /  
gavāṁ vilāsair amṛtam niśarṣayan śrīmān jagaccandraṅgāñendracandramāḥ // 80  
sa saumyamūrtih sakalāgamānām sūtreṣv adhītī pariniścitārthaḥ /  
saṁvigrāmaulir dadhate sma sūrer guṇān samagrān gaṇisampadaś ca // 81  
atha kalighanadurdināvatāre prasaradasajāḍasañcaye samantāt /*

<sup>4</sup> タパー・ガッチャについては [Dundas, 2007] を参照。

pratihatajinarājabhānutejomahimabhare 'navabodhyamuktīmārge // 82  
 nijagaṇasaraṇau pramādapaṇke caraṇarathāṁ pravilokya gāḍhamagnam /  
 gurur ayam asamas tam uddidhīrsur vṛṣabha ivāparam īkṣate sahāyam // 83  
 atha caitrapure vīrapratiṣṭhākṛd dhaneśvarah /  
 candragacche 'bhavat sūris tasmād caitragaṇo 'bhavat // 84  
 kālād bhuvanacandrāhvās tatra jajñe gurur gaṇī /  
 śuddhasaṃyamadhīs tasmād devabhadraś ca vācakah // 85  
 saṃvegarāṅgāmbudhidhautabuddhim jināgamāt klptacaritraśuddhim /  
 vidhīyamānārhatadharmaṇddhim śuddhair guṇaiḥ prāptajagatprasiddhim // 86  
 adhītinām sārajināgāmānām sūtreṣu cārtheṣu ca vedinām ca /  
 āmnātinām sādhūviśuddhasāmācāryām pravṛttam ca yathāvad asyām // 87  
 śrīdevabhadrābhidhāvācakendram tam śrījagaccandraṇuruḥ prabuddhah /  
 athopasāmpadvidhinā prapadya sa taddvitīyo dhuram asya dadhre // 88  
 samuddhṛtaḥ so 'tha vṛṣottamābhyām tābhyām abhūt sarvadhurīṇakābhyām /  
 svārūḍhanissaṅkhyamukṣapurendirāprāpaṇaśaktiśālī / 89  
 evam rāmaguṇaḥ sa lakṣmaṇataḥ śuddhakriyām  
 svapriyām praudhodyatkalināriṇā vanabhuvaḥ kiñ cid pramādād hṛtām /  
 tīrtvā mohamahāmbudhim ripum imam jitvādhilaṅkam śrayann  
 āninye svagaṇālaye kila jagaccandro gaṇendras tadā// 90  
 kalau yugāntopamite 'vatīrṇe pramādapaṇkākulamohavārddheḥ /  
 tathārhatām śāsanam uddadhāra sa bhūtalaṁ tv ādimahāvaraṇaḥ // 91  
 gurur mamaṭvām na kadāpi bheje grāme kule vā nagare ca deṣe /  
 śarīraśayyopadhiṣu pramādaṁ sa dūrayan gām vijahāra cātha // 92

教団の長である月のようなかの輝かしいジャガットチャンドラはマニラトナの正統な生徒であり、上昇によってその（教団）を喜びで照らし、その言葉と振る舞いはアムリタのようである。ジャガットチャンドラはあらゆる教えを身につけ、ジャイナの聖典を学び、その内容を身に帯び、眞の信仰を持つ者たちの王冠である。ジャガットチャンドラはスーリとしての資格と教団の長としての功績を持っていた。当時、カリ・ユガの暗雲が降りてきて、世界中が邪悪で愚かな者たちで満たされたとき、また太陽のような祖師たちの輝きが隠され、解脱への道に至れなくなってしまったとき、正しい行いの戦車は、たるんだ規律の泥土に沈んでいたので、それを引きだそうとする雄牛に似た比類無き師は同志を探した。

チャイトラの町でダネーシュヴァラという者がマハーヴィーラの像を設けていた。彼はチャンドラ・ガッチャのスーリであった。チャイトラ・ガッチャも彼に由来する。その教団内にブヴァナチャンドラという優れた師がいた。その生徒に節制と智慧において純粹に勤しむデーヴアバドラという教師がいた。有能な教師であるデーヴアバドラの知性は眞の宗教的衝動で満たされた海で浄化されたかのようだった。その振る舞いの純粹さは、祖師たちの伝統の中で作りだされたものである。彼はジャイナ教を普

及させ、その純粹な特質のために世間での評価を得ていた。ジャイナ教聖典の伝承にも通じ、経文とその意味を正しく理解していた。出家者の戒律をよく把握し、それに正しく従った。一方、かのプラブッダとなった優れた教師ジャガッチャンドラは、彼の教師としての忠誠をデーヴアバドラに正式に移し、彼と一緒に教団維持の軛を負った。軛全体を運ぶことができるこの2匹の強大な雄牛は、最終的な解脱を目指した多くの信者たちを運び出すことができるだけの教団を育て上げた。

教団の長ジャガットチャンドラはラーマに匹敵するほどの素晴らしい特質を持つ。ラーマがランカ一島まで渡り、敵を打ち倒し、自身の貞節な妻を自らの住処へ連れ帰ったように、彼は進行するカリ・ユガの形をとる敵によって持ち去られた正しい行いを（取り戻したのである）。カリ・ユガが到来したときにヴィシヌの化身である猪ヴァーハが大地を持ち上げるのと同じように彼はジャイナ教を弛緩の泥にはまつた幻惑の蓄積から取り出したのである。教師（ジャガットチャンドラ）は、村、家族、都市、または地域に関して「我が物」という感覚を持っていなかった。彼は大地の上をさまよい、身体、休息の場所、所持品に関する弛緩を遠ざけた。

#### *Gurvāvalī* 96-106

*tadādibāñadvipabhānuvarṣe 1285 śrīvikramāt prāpa tadiyagacchah /  
bṛhadgaṇāhvo 'pi tapetināma śrīvastupālādibhir arcyamānah //96*  
*vīrāc chareṣv aśvadharāmite 'bde 1755 śrīcandrāgacchasya tato babhūva /  
tādkṛtapaskarmata eva tasya guros tapānāma jagatprasiddham //97*  
*śrīcandrāgaccho 'tha bṛhadgaṇāś ca tapāgaṇāś cety adhunā sa vācyah /  
cāndram kulam koṭikanāmni gacche vājrī ca sākheti purā prasiddhiḥ //98*  
*gaṇam pramādo na na jādyam eṣaṇādoṣā na tasmin gaṇanāyake 'vati /  
na vādino vā tam ihopadudruvuḥ surakṣakam kṣetram ivāṇḍajavrajāḥ //99*  
*kalidviṣā bhgnapadasthitis trasan parāsutāsannadeśo 'pi tam gaṇam /  
durgāṇ nu labdhāsyā vibhoḥ samāśrayāc caritradharmaḥ punar ujjijīva saḥ //100*  
*śrīdevendramunīndro gacche vijayendunāmakaś cāpi /  
śrīdevabhadravācakamukhyā bhūṣākṛtas tasya //101*  
*cāritroddharaṇasakhe 'bhyadhikam śrīdevabhadragaṇirāje /  
bahumānam vahamāno guruved gaṇanām cakāraiṣah //102*  
*devabhadragaṇīndro 'pi saṃvignah saparicchadaḥ /  
gaṇendram śrījagaccandram eva bheje gurum mudā //103*  
*jātyajñānatapastejā hīravat sa guruṣv abhāt /  
tena hīrajagaccandrasūrir ity abhavat śrūtaḥ //104*  
*devyā giro bhavanagam svadhiyā 'dhigamya sārvsvataṁ kim api yantram agamyam anyaiḥ /  
tasyāḥ prasādavaśataḥ nrpateḥ sabhāyom āghāṭanāmani pure caturaṅgavāde //105*  
*dvātriṁśataṁ vikaṭadikpaṭavādirājān drāg sārvavaidyavidurān ajayat kramāt saḥ /  
bhagno na hīra iva kaiś cid iti prasiddhaṁ bhūpāt tad āpa virudam kila hīraleti //106*

1285 年（1228-29 CE）に、ブリハッド・ガナと名づけられた彼の教団はヴァストウパーラたちによって敬われ、「タパー」（「苦行者」）という名前を得た。マハーヴィーラ寂滅の 1755 年後、チャンドラ・ガッチャは、幸いなる「タパー」の名称を得た。チャンドラ・ガッチャ、ブリハッド・ガナ、タパー・ガッチャと今では呼ばれているが。以前はコーティカ・ガッチャ内のチャンドラ・クラやヴァジュラ・シャーカーとして知られていた。指導者のジャガットチャンドラが教団を維持していたとき布施について不注意、ゆるみ、欠点はなかった。鳥が充分に守られた田畠を襲わないかのように、その当時は論敵がこの教団を攻撃することはなかった。困難なカリ・ユガの時期にあっても、彼は再び教団を生き返らせた。

出家者たちの指導者であるデーヴェンドラとヴィジャヤチャンドラもその教団に所属していた。その重要な部下としてヴァーチャカのデーヴアバドラも含まれている。ジャガットチャンドラは、規律を向上させることで自身の特別な同志であり、教団の指導者の王であったデーヴアバドラを尊敬し、自分の教師と同等であると捉えていた。一方、教団の長老たちの王であり、世俗から開放されていたデーヴアバドラはというと、その支持者とともに教団の王であるジャガットチャンドラを自らの師として喜んで受け入れた。彼は、知識と禁欲によってもたらされる高貴な光沢のために、師たちの中でも真珠のように輝いていた。そのため、彼はヒーラ・ジャガットチャンドラ・スーリとして広く知られるようになった。以下がその具体的な理由である。

智慧の女神サラスヴァティーの神殿に音声を強める魔法の装置 (*yantra*) があった。他の者たちはそれに気づかなかつたが、その鋭敏な感覚で気づいた彼はその装置の助けを借りて、アーガータ王のもとで開かれた学僧たちの集会 (*sabhā*) での論争で、あらゆる分野に通じている 32 人の強力なディガンバラの論者たちにすぐさま打ち勝った。ジャガットチャンドラを真珠のように破壊されないことを賞賛する者たちがいたため、王から二つ名 (*biruda*) の「ヒーララ」（真珠）を授けられた。

さらに 16 世紀のダルマサーガラ (Dharmasāgara) は『プラヴァチャナ・パリークシャー』 (*Pravacanaparīkṣā*) で次のように述べている。

*Pravacanaparīkṣā* 1.20

*tatthavi rāyā sūrī so sūriparamparāi ahisitto / sohammāo jaṁbū jaṁbūo pabhava iccāi //*

この出家者たちに対してスーリは王（と同様）である。スーリの相承によって即位する。スダルマンからジャンブー、ジャンブーからプラバヴァへと（移ったように）。

16世紀後半にアクバルの宮廷に呼ばれたとされるヒーラヴィジャヤスリー (Hīrvijarasūri) もタパー・ガッチャの所属である。

### 5.3. カラタラ・ガッチャ (Kharatara Gaccha)

カラタラ・ガッチャ (Kharatara Gaccha) はグジャラートのアナヒラパータカ (現パートン) で10世紀にジネーシュヴァラ (Jineśvara) によって創始されたとされる。その経緯については14世紀のジナプラバスリー (Jinaprabhasūri) の『ヴリッダ・アーチャーリヤ・プラバンダーバリ』 (Vṛddhācāryaprabandhāvali) に記されている。

*Vṛddhācāryaprabandhāvali* 2 英訳 [Granoff, 1990] 参照

*annayā avasare sirivaddhamāṇasūriṇo mahīmaṇḍale viharamāṇā sīdhapurānayare saṃpattā / jattha sarassāt naī sayā vahai / tattha bahave māhaṇā nhāyanti / tesīṇ majhe pukkharaṇāgottīō māhaṇo sayalavijjāpārago nhāṇam kāūṇa bāhirabhūmīe gayāṇam sūrīṇam sammuhām milio / jiṇamayaṇam nindium laggo-ee seyaṇvarā suddā, vedavāhirā apavittā / tao guruṇā uttam ‘bho jaggānām amāhaṇā kim bāhiranhāṇēṇa / tuha sarīrasuddhī natthi, jeṇa tumāṇ matthae maṭayāṇ vahasi’ / tao vivāo jāo ‘jai mama siro maṭao taohaṇi tava sīso bhavāmi, annahā mama sīso tumāṇ’ / guruṇā bhaṇiyāṇ evāṇ hou tti’ / tao kuddheṇa teṇa siraveḍaṇavattho dūrī kao / paṭīo maṭayamaccho / paṇo hārio tao / gurusamīve sīso jāo / tao dikkham sikkham gahiūṇa siddhamtaviū jāo / guruṇā juggam jāṇiūṇa niyapaṭte thavio / jinesarasūrī ii nāmaṇ kayam / pacchā vaddhamāṇasūrī aṇasāṇam kāūṇa devalogam patto / tao jinesarasūrī gacchanāyago viharamāṇo vasuhāṇ aṇahillapuraṭṭaṇe gao / tattha culasīgacchavāsiṇo bhaṭṭāragā davvalimgiṇo madhavaiṇo ceiyavāsiṇo pāsai / pāsittā jiṇasāṣaṇunnaikae siridullaharāyasabhāe bāyāṇ kayam / dasasaya cauvīṣe vacchare te āyariyā macchariṇo hāriyā / jiṇesarasūriṇā jiyam / rannā tuṭṭheṇa kharatara ii biruḍām dinnāṇ / tao param kharataragaccho jāo //*

別の機会にヴァルダマーナスリーは世界中をめぐり、シーダプラの町に至った。サラスヴァティー河が常に流れしており、そこで多くの聖者たちが沐浴していた。その中にあらゆる学間に通じたプシュカラナー氏族のジャッガというバラモンがあり、そこで沐浴していた。ある日、ジャッガは沐浴の後、休息に向かうジャイナ僧（ヴァルダマーナスリー）に出会った。ジャッガはジャイナ教の教えをからかって言った。「この白衣派の者たちはヴェーダを学ぶことも許されない不浄の者たちなのだからシュードラと同じであるな」そこで師は答えた。「バラモンのジャッガ様、あなたは戸外で身体を淨めるためにどんな良きことを行ったのですか。私に言わせれば、あなたの身体はまったくもって淨化されていない。なぜならばあなたの頭の上に不浄で汚染された身体が載っているからです」彼らはその問題について議論することにした。そこでジャ

ッガは次のような賭けを持ちかけた。「もし私の頭の上に身体が載っていたなら、私はあなたの弟子になろう。しかしそうでなければあなたが私の弟子になりなさい」師は答えた「お好きなように」怒りに燃えたバラモンは自分のターバンをほどくと死んだ魚がそこから落ちた。ジャッガは賭けに負け、ヴァルダマーナスリーの弟子となった。彼は出家者としての訓練を積み、教えを受け、ジャイナ教の教義に精通するようになり、ジネーシュヴァラスリーの名前を与えられた。しばらく後、ヴァルダマーナスリーが絶食し天界に赴いた。その後、ジネーシュヴァラスリーは教団の長となり、各地を巡り、アナヒラプラ（＝アナヒラパートカ）に至った。そこで彼はチュラシー・ガッチャに属する多くの財産豊かな見た目だけの出家者たちが豪華に飾られた寺院に住み、豊かな組織を運営しているのを見た。そのようなふるまいをとる彼らをして、さらなるジャイナ教の教えに忠実なジネーシュヴァラスリーはドゥルラバラージャ王の宮廷で彼らとの論争を行った。1024年（967-968 CE）に彼はその傲慢な師たちとの議論に勝利した。彼を好ましく思った王は彼に敬意を示して「カラタラ」（恐るべき）の名を授けた。そのときより、その教団は「カラタラ・ガッチャ」として知られるようになった。

#### ジナダッタスリー (c. 1075-1154)

ヘーマチャンドラやシャーリバドラと同時代の12世紀の人物である。おなじ時期より流行し始めるラーソーの形式を用いた作品がある。

#### *Upadeśarasāyanarāsa* 36-37

*uciya thutti thuyapāḍha paḍhijjahim / je siddhamtihim sahu /  
tālārāsu vi dimti na rayanahim / divasi vi laudārasu sahum parisihim //36  
dhammiya nādaya para naccijjahim / bharahasagaranikkhamana kahijjahim  
cakkavaṭibalarāyaha cariyaiṃ / naccivi antī huṇti pavvaiyaiṃ //37*

上記の *stuti* や *stotra* は聖典と一緒に唄うのならば歌ってもよい。ただターラー・ラーソーは夜に歌ってはいけない。ラウダー・ラーソーは男たちと歌うのならば、昼でも歌ってはいけない。教えに適った舞踊は踊ってもよいが、バラタやサガラの出陣や転輪聖王やバラデーヴアの伝記を語ってはならない。踊った後に出家者たちが（興奮して）出家の状態でなくなってしまうから。

#### ジナプラバスリー (c. 1261-1333)

*Vividhatīrthakalpa* 51、和訳にあたっては [Chojnacki, 1995] の仏訳を参照した。

*io a sirijoginipure sirimahammadasāhisagāhahirāo kahiñci avasare patthuāe pañdiaguṭhie satthavyārasaṁsayamāvanno sumarei gurūṇam guṇe bhañai a jai te bhaṭṭārayā saṁpayam hama sahālamkaraṇam humtā tā majha mañogayasamatthasamasyasalluddharaṇe helāe khamamta / nūṇam vihappaī tabbuddhiparājio ceva bhūmimujjhia sunnam̄ gayañadesa-mallīṇo / ittham̄ gurūṇam bhūvaikijjamāṇagunavannaṇāvaiare, avasarannū takkālam dauatāvādādāgao tājalamalikko bhūmialamiliabhlavaṇto vinnavei / "mahārāya! samti te tattha mahappāṇo / param̄ tannayaranīramasahamāṇā kisiañgā gāḍham̄ vaṭṭamti / tao saṁbhariaguruṇapabbhāreṇa bhūmināheṇa so ceva mīro āiṭho""bho mallika! siggham̄ gaṇtūṇa duvīrakhāne lihāvesu phuramāṇam̄ / pesesu tattha / jahā tārisasāmaggie ceva bhaṭṭārayā puṇa ittham̄ imti / (中略)*

あるとき、ジョーギニープラで偉大なる支配者マハンマド・シャーが大勢の賢者を宮廷に呼び出すと、その者たちはいつものように宗教上重要とされる問題について議論を始めた。マハンマド・シャーはいくつかの点について明らかにしたいと考えたところ、ジナプラバースリーの素晴らしい能力について思い出した。そして彼は言った。

「もし出家者たちの長たるジナプラバースリーが私の宮廷にいらっしゃれば、私の心にある疑いのとげをすべて簡単に取り除いてくれるだろう。なぜなら、神々の師であるブリハスパティでさえも、ジナプラバースリーの智慧の光に打ち負かされ、地上から逃げ出し、彼に匹敵する者のいない天界へと避難したのだと思えるからだ。ダウラターバードから来た長官のタージャラマリッカは王が賞賛する尊者の素晴らしい特質のことを聞き、好機を逃すことなく、王の眼前でひれ伏し訴えた。「偉大なる王よ、その偉大なる者はダウラターバードにあります。しかしそこの水が彼には合わず、まったく痩せ細ってしまいました」その言葉でさらに彼の偉大さを思い出した王はその貴族に命じた。「長官、すぐに出立して、書記が書いた命令書を持って行きなさい。そして直ちに命令書を送り、出家者たちの長が移動に必要なもの全てを与えられて、すぐにここにいらっしゃるようにしなさい」(中略)

*io cirovaciabhattirāeṇa abhimuhamāgaehim dañṣaṇatimittao vi amayakuṇḍaṇhāehim va dhannappāṇam̄ mannamāṇehim āyariyajaisamghasāvayavimdehiṇ pariarīā bhaddavayasītabīā jāyā rāyasabhāmaṇdaṇam̄ jugappahāṇā / takkhaṇam̄ āṇamdabhārānibbharehim nayaṇehim abbhutthāṇamivāyaramteṇa sirimahammadapātasāhiṇā pucchiā komalagirāe kusalapauṭṭim / cuṇḍio a sasiñeham̄ gurūṇam̄ karo dharanirāeṇa; dhario a hiae accamta-darapareṇa / (中略)*

そしてついにバードラパダ月白月2日に行者や学僧たちに囲まれ崇拝されながら、出家者たちの支配者であり出家者たちの長、彼を目にした者たちは自分たちが最も幸福であると感じ、またまるでアムリタの池につかっているように感じる、そのジナプラバースリーが王宮を飾るためにやってきた。彼が王宮に入ってきた瞬間、世界の主に

して偉大なるムハンマドはジナプラバースーリを目にできる喜びで溢れた目を持ち上げたので、ジナプラバースーリに敬礼するために前に出てくるかのようだった。柔らかく優しい声で、彼はその出家者にどのように旅をしたのか尋ねた。そして、大地の主は愛情を込めて出家者の手に接吻し、その手を自分の胸に優しく抱いた。（中略）

*evam niiccam rāyasabhāgamaṇapamdiavāivāmavijayapuvvam pabhāvanāe payat̄tamānāe /*  
こうしてジナプラバースーリは王の宮廷における討論で多くの論敵を打ち負かし、ジャイナ教の立場を強化することを常に心がけていた。（中略）

*tahā annayā nariṁdeṇa dūrao niiccam samāgamaṇe gurūṇam kāṭham ti ciṁtiūṇa padinnā sayam eva niapāsāyapāse sohamtabhavanarāī; āīṭhā ya vasiṁ tattha sāvayasamghā / bhaṭṭārayasarāai tti kayam se sayam nariṁdeṇa nāmam / kārio tattheve vīravihāro posahasālā ya pātasāhiṇā / tao terasayavanāsiavarise āsāḍhakīṇhasattamē lumahate mahīvaisamātīṭhagīyanāṭabāiasampadāe payadijjamāṇaamāṇamahūsabasāram, sayam nariṁdeṇa dāvijjamāṇamāṇgalam, paviṭhā posahasālam bhaṭṭārayā / saṁtosīā pūdāneṇam viusā / uddhariā dāneṇam dīṇāṇhāiloā /*（中略）

そしてある日、大地の主は、ジナプラバースーリが自身の教団を求めていたとき、遠方から来るのは難しいに違いないと考え、自分の宮殿のすぐ隣に、非常に多くの素晴らしい建物のある新しい建築群をジナプラバースーリに与えた。そして、彼はそこに住むようジャイナ教団に指示した。王は自分でそのエリアを「バッターラカ・サラーイ」すなわち「出家者たちの長に属する地区」と名づけた。偉大なムスリムの主は、そこにマハーヴィーラ寺院を建て、また信者たちの礼拝と祭式のための素晴らしい会堂を建設した。そして、ムスリムが使用する暦の 13 年目、アーシャーダ月黒月 7 日の吉祥の時間に、王の命令で歌と踊りと音楽とともに大きな祭典が執り行われた。王自身も祝辞を捧げる中、出家者たちの長が会場に入った。多くの賢者は適切な贈り物で敬われた。当地の貧しい人々や惨めな人々は豪華な下賜品で惨めな状況から救われた。

*caliā puṇa 'annayā maggasiramāse puvvadisajayajattāpatthieṇa appaṇā saha nariṁdeṇa / kāriā ṭhāne ṭhāne baṇdimoaṇāinā jiṇadhammappabhāvanā / uddariam sirimahurātittham / saṁtosīā dāṇāṭhiṇ diavarāiṇo /*（中略）

マールガシールシャ月になると、ジナプラバースーリは東部地域の征服に乗り出したスルタンに再び同行した。ジナプラバースーリは、囚人を解放するなどの正しい行いを通じて、あらゆる場所でジャイナ教の拡大に努めた。彼はマトゥラーの聖地を修復し、優れたバラモンたちから贈り物を贈られた。（中略）

*visesao disijattāo samāgae mahārāe pavaṭṭamti ūsavā ceiyasahīsu / saṃmāṇei guruṇo uttarottaramāṇadāṇenā sirisavvabhomo / vajjamti paidisaṃ sūrisavvabhūmāṇam pabhāvanāsārā jasapadahā / viharāṇti niruvatasaggam savvadesesu seambarā diambarā ya rāyāhirāyadinnaphuramāṇahatthā / kharataragacchālamkāraguruppasāyāo sagasinna-paribhūe vi disicakke kayāim gurūhim phuramāṇagahanenā akudobhayāim sirisittujjagirināra-phalavaddhippamuhatitthāim / ujjoiā iccāikiccehiṃ siripālittaya-mallavāi-siddhasenadivāyara-haribhadda-hemacandasūrippamuhā puvvapurisā / kiṃ bahuṇā sūricakkavaṭṭīnam gunehim āvaggiassa nariṃdassa payadā eva payaṭṭamti sayaladhammakajjārambhā /*

そして、ムスリムの支配者が遠征から戻ると、多くのジャイナ寺院で祝祭が祝われた。栄光ある全世界の主は、ジナプラバースリーに、次から次へとますます豪華な贈り物を贈った。そして、毎日、栄光の旗がジャイナ教の信仰を強化するかのように全世界の栄光の主によって高々と掲げられた。白衣派も裸形派も、ムスリムの主から得た通行証を手にして、危険や脅威なしに王国の隅々まで旅をした。そして彼の軍隊が征服したすべての場所で、カラタラ・ガッチャの華であるジナプラバースリーを好むムスリムの主は、栄光たるシャトルンジャヤやギルナール、パラヴァルディのようなジャイナ教の聖地について勅令で安全を保証した。これらの偉大な功績により、ジナプラバースリーは彼以前の偉大な出家者たち、すなわち栄光あるパーダリピタ、マッラバーディー、シッダセーナ・ディバカーラ、ハリバドラスリー、ヘーマチャンドラスリーの功績に匹敵するようになった。要するに、全人類の主であるムスリムの支配者が、ジナプラバースリーの優れた資質に打ち負かされ、ジャイナ教の信仰のために多くの奉仕を行っているのである。

## 6. 聖者伝の変容と当時の社会状況

以上第1節から第5節までの内容を踏まえながら、63偉人とチャリタ文学の形成、チャリタ文学からラーソー文学などの多様な文学形式への移行といった文学作品の歴史的変化がジャイナ教団の変化、ひいては当時の北インド西部の社会状況の変化と結びつくかどうかを検討する。

6-12世紀に書かれたチャリタ文学からはラーマ物語とクリシュナ物語という影響力の強い説話を取り込まざるを得なかった状況が推察できる。ジャイナ教の中心地が北インド東部から西部へと移動するにつれ、北インド西部で信仰の強かったラーマやクリシュナなどの存在もジャイナ教の枠内で説明する必要あつたためと思われる。そのため、本来はマハーヴィーラを初めとした24祖師、そのなかでもリシャバ、ネーミナータ、パールシュヴァ、マハーヴィーラの4名の説話を占めていた聖典の時期とは異なり、バラタ

を始めとした転輪聖王の系列やクリシュナ物語を包含するヴァースデーヴァの系列の説話が求められ、祖師伝に付隨する形で増えていったのであろう。同時期のジャイナ教徒の言語使用状況も傍証となる。ジャイナ教徒はその派を問わず、著作のための言語として聖典に用いられたマガダ語に近い言語よりもむしろ北インド西部に由来するマハーラーシュトラ語やアパブランシャ語を文学作品や聖典注釈に用いた。同時にサンスクリット語の伝統を保持する階層へのアプローチのために同様の説話をサンスクリット語でも作成した。このことはそういった説話を聞かせる対象が実際に北インド西部地域に居住する人びとであったことを示す。そのような「ジャイナ化」の試みの成果とも言えるのが12世紀のチャウルキヤ朝におけるジャイナ僧ヘーマチャンドラとクマーラパーラ王（Kumārapāla、在位1145-1171）との関係の強さである。ソーマプラバの『クマーラパーラ王の回心』に記されるようなクマーラパーラ王のジャイナ教への改宗が事実かどうかの確認はとれないが、ジャイナ教徒の政治的な影響力は11-12世紀頃のグジャラートおよびラージャスター地域では比較的強かったと考えられる。

一方、ジャイナ教聖者伝の中にジャイナ教外の多くの説話を取り入れた結果、教義上は祖師の下位にあたるクリシュナやラーマのエピソードが聖者伝文学の大部分を占めるようになる。63偉人全てを扱う『六十三偉人伝』のような作品でもその傾向が見られる。だが、ヘーマチャンドラと同時代の12世紀以降、同様の作品が急速に減少する。それに代わって増えていくのがラーソー、バーラマーサーなどの個々の聖者を扱った短い作品群である。それらの新しい形式、特にラーソーは8-10世紀のスヴァヤンブーによる『スヴァヤンブーチャンダス』（*Svayambhūchandas*）等々に言及があるため、ジャイナ教徒の著作者たちも以前からその存在を認識していたものと思われるが、実際の作品への適用は12世紀後半までしか遡ることはできない。そこには何らかの状況変化があったものと推察できる。

一方、ジャイナ教団の変化を見ると、ガッチャの創立はおよそ11世紀以降となるが、14世紀以降になると聖典上の人物と実在したガッチャの創始者とを繋げ、現代にまでいたるガッチャの長（スーリ）の系譜が整備されていく。これはこれまでチャリタ文学で培われたような様々な信仰対象をジャイナ教聖者伝に組み込んでいく仕組みを実際の人物が創設したガッチャにも適用したと考えることができる。スーリたちについてラーマや転輪聖王に比する描写がみられるのもチャリタ文学からの影響を強く示唆する。チャリタ文学が活発に作成された時期はチャウルキヤ朝がアナヒラパータカを中心にグジャラートからラージャスター南部までを勢力下に置いていた時期と重なる。特にジャヤシンハ王はこれまで別個の勢力であったサウラーシュトラ半島部をチャウルキヤ朝に従属させる。

サウラーシュトラ半島にはジャイナ教徒にとっても重要な聖地であるギルナール山やシャトルンジャヤ山があり、また貿易港として発達したソームナートも含まれている。(図4 参照)



図4. グジャラート主要地の位置

[山畠 2018a] で指摘したようにチャウルキヤ朝のグジャラート海岸部への拡張により、従来のジャイナ教文学とは異なる文学伝統がジャイナ教徒の文学活動に影響した可能性がある。実際、ジャヤシンハ王の次代クマーラパーラ王やヘーマチャンドラが活動した12世紀後半には『ウパデーシャラサーヤナラーサ』や古グジャラート語で書かれた『バラテーシュヴァラバーフバリラーサ』のようにジャイナ教の教説や聖者伝を主題しながらも、形式としてはそれまでにまとまった作品のなかったラーソーの形式を用いた作品が作られるようになる。それまで韻律書などでしか言及のなかったラーソーが突如現れ、またそれまでの古典的な言語であるプレークリット諸語やアパブランシャ語ではなく、古グジャラート語という地方語の使用が見られるようになることは、それまでのチャウルキヤ朝におけるチャリタ文学を中心とした文芸の伝統からだけでは説明しがたい。グジャラ-

ト地域で以前から使用されてはいたが、権威を得るには至っていなかった諸要素が、サウラーシュトラ半島部の住民が聞き手として加わることにより、文芸の世界の中に流入してきたという解釈は当時の社会状況を考慮すると充分妥当であろう。クマーラパーラ王の後、チャウルキヤ朝は本拠地のアナヒラパータカにおいて、1197年と1210年にアイバク（Qutub al-dīn Aybak）から略奪の被害を受けている。その後の混乱を経て王家がそれまでのソーランキ一家（Solaṇkī）からヴァーゲーラ家（Vāghela）へと変わる。この頃を境にこれまで作成されていたチャリタ文学の作成が滞るようになる。しかし、ラーソー文学の作成はヴァーゲーラ家の時代により一層盛んになっている。特に、『レーヴァンタギリラーサ』でも言及される商人出身の宰相ヴァストゥパーラとテージャパーラの兄弟はギルナル山やアーブー山といった聖地における寺院建設の寄進を多く行っており、それにまつわる聖地型ラーソーや祖師たちのラーソーが作成された。[Laughlin, 2003] 文学作品の傾向の変化を政治状況の変化と突き合わせると、聖者伝文学の形式がラーソーに置き換わる時期とチャウルキヤ朝が広範な政治的影響力を失っていく時期とが概ね一致する。

ジャイナ教文学の歴史上、聖者伝を中心としたジャイナ教文学は14世紀頃までに2度の大きな変化を経験している。まず生じた変化は聖典の聖者伝からチャリタ文学への変化である。ジャイナ教が北インド西部地域へ移動した際に、当該地域の言語であるマハーラーシュトラ語、後にはアパブランシャ語を著作のための言語として採用したのと同様に、その地域すでに受容されていたラーマ物語やクリシュナ物語をジャイナ教の偉人の体系に組み込み、63偉人という枠組みが作りだされたと考えられる。

それに対して、12-13世紀の変化はジャイナ教文学を受容する層の中心がサウラーシュトラ半島部へ移動していった状況が背景にある。新たな受容層は、ブラークリット諸語やアパブランシャ語の伝統に基づいたチャリタ文学よりも、言語（古グジャラート語）、形式（ラーソー、バーラマーサー）、内容（夫婦の別離、聖地称揚）のそれぞれにおいてより地域性の強いものを好んだものと思われる。さらにその状況を推し進めたのがチャウルキヤ朝の影響力の低下である。ヘーマチャンドラの立場が典型的であるが、アパブランシャ語を中心としたチャリタ文学の伝統は王家との関係が大きな役割を果たしている。そのため、13世紀前半のチャウルキヤ朝の混乱はそれまでの長大なチャリタ文学作成の停滞を招いた。その状況下で新たに文芸の庇護者となったのはヴァーゲーラ家、あるいはヴァストゥパーラなどの商業者出身の者たちである。そのため、同時期に作られたジャイナ教の文学作品はチャリタ文学のような長大な聖者伝ではなく、より歌謡や舞踏に適した比較的短いラーソーが主となった。13世紀後半のヴァーゲーラ家の時代はジャイナ教文学の観点から見ると、11世紀から12世紀にかけてゆるやかに進んでいた新たな形式への移

行が急激に進んでおり、ジャイナ教文学史やグジャラート文学史の観点からは重要な時代であると言える。

## 参考資料

### 一次文献

- [*Antagadadasāo*] Muni Nathmal. (1974). *Amgasuttāni*. vol.3. Ladnun: Jain Vishwa Bharati. pp.539-610.
- [*Anuyogaddārā*] Puṇyavijayajī. (1999). *Anuyogadvārasūtram*. Bombay: Adhī Mahāvīra Jaina Vidyālaya.
- [*Cauppanamahāpurisacariya*] Bhojak, Amritlal Mohanlal. (2006). *Cauppanamahāpurisacariyam*. Ahmadabad: Prakrit Text Society.
- [*Gurvāvalī*] Munisundarasūri. (1910). *Gurvāvalī*. Varanasi: Dharmābyudayayantrālaya.
- [*Harivamśapurāṇa*] Jain, Panna Lal. (2003). *Harivamśapurāṇa of Āchārya Jinasena*. New Delhi: Bharatiya Jnanpith.
- [*Kalpasūtra*] Jacobi, Hermann. (1879). *The Kalpasūtra of Bhadrabāhu*. Abhandlungen Für Die Kunde Des Morgenlandes. Vol. 7. Bd., no. 1, Leipzig: F.A. Brockhaus.
- [*Vṛddhācāryaprabandhāvalī*] Acharya, Jina Vijaya Muni. (1956). *Kharatara-Gaccha-Bṛhad-Gurvāvalī*. Bombay: Bharatiya Vidya Bhavan. pp.89-96.
- [*Mahāpurāṇa*] Vaidya, P. L. and Devendra Kumar Jain. (1979-99). *Mahāpurāṇa*. 5 vols. New Delhi: Bharatiya Jnanpith.
- [*Nandīsutta*] Punyavijayaji. (2004). *Nandīsuttañ with Cūrṇi*. Ahmedabad: Prakrit Text Society.
- [*Nemināthacatuṣpadikā*] Bhayani, Harivallabh Cunilal. (1975). *Prācīna Gūrjara Kāvya Sañcaya*. Ahmedabad: L. D. Institute. pp.95-97.
- [*Paumacariya*] Jacobi, Hermann and Muni Shri Vijayaji. (2005). *Pauamacariyam*. 2 vols. Ahmedabad: Prakrit Text Society.
- [*Revantagirirāsa*] Dalal, C. D. (1920). *Prāchīna Gurjara-Kāvyasangraha*. Baroda: Central Library. pp.1-7.
- [*Upadeśarasāyanarāsa*] Gandhi, Lalchandra Bhagwandas. (1927). *Three Apabhramśa Works of Jinadattasūri*. Baroda: Oriental Institute. pp. 28-65.
- [*Uttarajjhāyā*] Charpentier, Jarl. (1922). *The Uttarādhyayanasūtra*. Uppsala: Appelbergs boktryckeri Aktiebolag.
- [*Uttarapurāṇa*] Jain, Pannalal. (1944). *Uttarapurāṇa*. New Delhi: Bharatiya Jnanpith.
- [*Vasudevahīṇḍī*] Caturvijaya-and Punyavijaya. (1931). *Vasudevahīṇḍiprathamakhaṇḍam*. Bhavnagar: Śrī Jain Ātmānand Sabhā.

[*Vividhatīrthakalpa*] Jinavijaya, Muni. (1934). *Vividhatīrthakalpa*. Śāntiniketan: Singhī Jaina Jñānpīṭha.

[*Vyavahārabhāṣya*] Kusumprajna, Samani. (1996). *Vyavahāra Bhāṣya*. Ladnūn: Jaina Viśva Bhāratī Samsthāna.

## 二次文献

- Barnett, L. D. (1907). *The Antagadadasāo and Anuttarovavāiya-dasā*. London: Royal Asiatic Society.
- Bruhn, K. (1954). *Sīlāṅkas Cauppaṇṇamahāpurisacariya: ein Beitrag zur Kenntnis der Jainaundergeschichte*. Hamburg: Cram, De Gruyter.
- Chojnacki, C. (1995). *Vividhatīrthakalpah : regards sur le lieu saint Jaina*. Pondichéry: Institut français de Pondichéry, École française d'Extrême-Orient.
- Cort, J. E. (1993). An overview of the Jaina Purāṇas. In Wendy Doniger(ed.) *Purāṇa Perennis: Reciprocity and Transformation in Hindu and Jaina Texts* (pp. 185-206). New York: State University of New York Press.
- Dundas, P. (2007). *History, Scripture and Controversy in a Medieval Jain Sect*. New York: Routledge.
- Granoff, P. (1990). Jain Biographies: Selections from the Prabandhakośa, Jain Biographies: Selections from the Prabandhakośa. In P. Granoff (ed.), *The Clever Adulteress and Other Stories* (pp. 140-181). Oakville, New-York, London: Mosaic Press.
- Jaini, P. S. (1993). Jaina Purāṇas: A Purāṇic Counter Tradition. In Wendy Doniger(ed.) *Purāṇa Perennis: Reciprocity and Transformation in Hindu and Jaina Texts* (pp. 207-249). New York: State University of New York Press.
- Kelting, M. W. (2009). *Heroic Wives Rituals, Stories and the Virtues of Jain Wifehood*. New York: Oxford University Press.
- Kulkarni, V. M. (1990). *The story of Rāma in Jain literature : as presented by the Śvetāmbara and Digambara poets in the Prakrit, Sanskrit, and Apabhraṁśa languages* (1st ed. Vol. no. 3). Ahmedabad: Saraswati Pustak Bhandar.
- Laughlin, J. C. (2003). Portraiture and Jain Sacred Place: The Patronage of the Ministers Vastupala and Tejaphala. In P.Granoff and K.Shinohara(ed.) *Pilgrims, Patrons, and Place: Localizing Sanctity in Asian Religions* (pp. 297-331). Vancouver: UBC Press.
- Paniker, K. A. (1999). Medieval Gujarati Literature. In K. A. Paniker(ed.) *Medieval Indian Literature: An anthology* (Vol. 2, pp. 1-439). New Delhi: Sahitya Akademi.
- Vaudeville, C. (1986). *Bārahmāsā in Indian Literatures: Songs of the Twelve Months in Indo-Aryan Literatures*. New Delhi: Motilal Banarsidass.

- 山畠倫志 (2017) 「ネーミナータ物語の変容 — 行伝から季節詩へ」『印度學佛教學研究』第 66 卷第 1 号, 475-470 頁.
- (2018 a) 「ジャイナ教聖者伝の展開と人間觀の変容」『日本佛教學會年報』第 83 号, 90-109 頁.
- (2018 b) 「ジャイナ教における六十三偉人の形成とラーマ説話の關係」『印度學佛教學研究』第 67 卷第 1 号, 494-488 頁.

*RINDAS Series of Working Papers by Integrated Area Studies on South Asia,  
National Institutes for the Humanities*

National Institutes for the Humanities (NIHU)

<https://www.nihu.jp/ja/research/pj-s-asia>

Integrated Area Studies on South Asia (INDAS-South Asia)

<http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

The Center for South Asian Studies, Ryukoku University (RINDAS)

<https://rindas.ryukoku.ac.jp/english/>

RINDAS Series of Working Papers 32

## ジャイナ教聖者伝の展開とジャイナ教団

山畠倫志

---

2021年3月発行 非売品

発行 龍谷大学南アジア研究センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

龍谷大学深草キャンパス 至心館455

TEL: 075-645-8446 FAX: 075-645-2240

<http://rindas.ryukoku.ac.jp/>

印刷 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麁屋町東入石不動之町677-2

TEL: 075-343-0006

---

ISBN 978-4-904945-74-2



ISBN 978-4-904945-74-2